はじめに

各講で、「取り上げた題材の大学」の入試傾向を説明していますので、参考にしてください。本講座で各大学の出題傾向をしっかり掴み、合格を手に入れるように一緒に頑張りましょう！（講義を見終えたら、もちろん、自分が一番行きたい大学・学部の過去問を重点的にやるべきですが、万一それが終われば、まずは同じ大学の他学部の過去問を、そして、さらにそれが終われば、数多くいろいろな大学の過去問をやること）。

＊本講座は「文法」・「読解のルール」が理解できていることを前提に講義をしています。

予復習・授業の受け方について

各講の動画を見る前に、必ず該当講の予習をすること。予習が終われば、時間をあけずに該当講の動画を見てください。どうしてその解答を選んだのか、根拠を覚えている間に見ることが重要です。講義を見終えたら、復習を必ずすること。間違えた問題があった場合は、「なぜ」間違えたのか、その原因になるところをきちんと潰して、次回同じような問題が出たときには解けるようにしていきましょう。「復習問題」がありますが、授業で扱っていない問題がたくさんあるはずです。授業で扱っていないものは、その講で取り上げた題材の大学の他学部の過去問です。「復習問題」というよりは「チャレンジ問題」という位置づけで解いてください。もちろん解説があるので、実施後にきちんと読むこと。あとは、解答解説に重要単語も載せていますので、そこに掲載されている単語（特に太字）は完璧にしてくださいネ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

目次

第一講『しぐれ』関西大学……p.3
第二講『松陰中納言』同志社大学……p.17
第三講『落窪物語』関西学院大学……p.25
第四講『袋草紙』関西大学……p.38
第五講『古今著聞集』／『明恵上人日記』同志社大学……p.53
第六講『松帆浦物語』関西学院大学……p.66
第七講『ひとりね』／『折たく柴の記』近畿大学……p.77

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第一講『しぐれ』　関西大学

左大臣には兄妹の二人の子どもがあった。入内（じゅだい）させようと大切にしていた妹の姫君（問題文中では「女御（にょうご）」）が風邪（かぜ）で清水寺に参詣するのだが、心配な父、左大臣は、兄の中将（物語の主人公。同じく「御兄、中将殿」「中将殿」）を遣いに参らせる。中将はそこで、急な時雨（しぐれ）に雨宿りする姫君（女主人公。同じく「姫君」）に出会う。本文はその出会いの場面であるが、読んで、後の問いに答えよ。

さて二三日にもなりければ、おぼつかなしとて、御兄、中将殿を清水へ遣り参らせたまひけり。*1紅葉落葉（こうえふらくえふ）の狩衣（かりぎぬ）に御仮粧ありて、やがて*2先がけ、侍（さぶらひ）、御随身（みずいじん）召し具して清水の西門（さいもん）へ入らせたまへば、参り下向の輩（ともがら）、目を驚かして見たてまつるに、*3女御の御心のおぼつかなくいかがとおぼしければ、「侍ども、とくとく」とて、面面急ぎ召し具して堂（だう）の辺（へん）をざざめきて上りたまふ。折節、にわかに空曇り風吹きて、はしたなき時雨する。参り下向の数多きなかに、年のほど十五六ばかりなる姫君のなのめならずうつくしき、女房達四五人してぬらさじと立ち隠す。中将殿、これを御覧じて、わがささせたまひたる御傘、*4六位の進（しん）にておくらるる。姫君、こはいかにとおぼしめして見上げたまひつる御目のうちのけたかさ、あくまで愛敬（あいぎやう）がましくてうつくしくぞおはしける。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

さて、姫君は本堂の東の縁(えん)に立たせたまひて、「今は御傘参らせよ」と仰せける。中将殿はぬれながら御傘待ち得させたまひて、「この人々はいづくにぞ」と問はせたまへば、「いまだあれに立たせたまひて候ふ」と申せば、やがて人を遣はせて見せられけれども、おはせざりけり。さて、女御の御心地、別の事に渡らせたまはねば、やがて御下向あるべけれども、傘さしておくりつる人の事、御心にかかりければ、「今宵はこれに通夜(つや)せん」とて仏の御前にあくがれ居たまひけり。尋ねん方も覚えず、せん方もなければ、ただつくづくと眺めのみせられて、局(つぼね)に入りたまひたれども、静心なかりけり。

さる程に、隣の局に人の籠(こも)りてゆゆしく忍びたるよそほひなりければ、怪しくてここかしこより覗(のぞ)きたまへば、内には几帳(きちやう)を引かれたり。見るべきやうもなかりけるに、柱の節抜けの穴のありけるに紙を丸めて押し支(か)ひたり。引き抜きて見たまへば、傘さしておくりし人なり。見るに胸うち騒ぎて覗き入りて見たまへば、時雨にぬれたる装束を脱ぎ置きて干し散らし、姫君は綾羅(りようら)の紫の衾(ふすま)引きて寄り臥(ふ)したまへり。四十ばかりなる女房の清げなるが御側(そば)にさし寄りて、巻貝磨(す)りたる硯(すずり)の蓋(ふた)にいろいろの果物どもを調へて、「これこれ」と勧めけれども、姫君は御目をも懸けられず。ゆゆしげなる気色にて、いかに申せども答(いら)へたまはねば、この女、申すやう、「例の、また、むつかしや。御覧じ入れさせたまへかし。よろづ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

御心苦しくこそ候へ。(A)あはれ御親に添ひ参らせたまひて候はば、今かかる端近き御歩(あり)きなどよもあらじ。この精進のついでに賀茂へも参らばやと思ふに、かやうにくたびれさせたまひてはいかがせん」とぞ申しける。また、若き女二人、さし寄りて申すやう、「生まれさせたまひてより後は、今日こそ始めてかち歩き。仏もいかばかりいとほしく御覧ずらむ」と、かやうに面面に申しけれども、姫君は寄り臥してくたびれたまへる御気色、なのめならずぞうつくしき。

さて、日も暮れなんとす。「参りを始めばや」とて、十二三ばかりなる*5上童(うへわらは)を一人御伽(おとぎ)に置きて、女房四五人うち連れて拝礼しにぞ出でにけり。その時中将殿、よき暇かなと嬉(うれ)しくおぼしめして、紅葉襲(もみぢがさね)の薄様(うすやう)の、殊(こと)に匂(にほ)ひ深きに文を書きて遣(や)りたまふ。詞(ことば)なくして、

　　たまぼこの道行(みちゆき)ぶりに見るよりも契りは深き物と知らずや

と、かやうに書きて随身を召して、「これ、並びの局へ参らせよ」とて賜(た)びにけり。さてまた中将殿は覗きたまふに、随身遣戸(やりど)をほとほとと叩(たた)けば、「誰(たれ)やらん」とて出でたるに、「時雨の雨の時、御傘参らせたまへる人の文にて候。参らせたまへ」と申せば、上童取りて内へ入り、「御傘の主(ぬし)の文(ふみ)なり」とて参らせけり。姫君起きたまひて、「その文持て」とて持たせて、

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

中をば開けずしてつくづくと御覧じて、「人違(たが)へにてぞあるらむ。思ひも寄らぬ事なり」とて、御手をも触れず、「物の主に取らせよ」とて返されたまひ、随身「情けなし」と申せば、「さらば文を取りたらんところへ捨てよ」と仰せられければ、立ち出(い)でて、雨落(あまお)ちにうち捨つる。その上は力なくして取りて帰りぬ。中将殿、いかがせんとぞおぼしける。

（『しぐれ』より）

注

＊1　紅葉落葉の狩衣＝紅葉や落葉の模様を織りだした狩衣。狩衣は貴族の平服。

＊2　先がけ、侍、御随身＝それぞれ、行列を騎馬で先導する者、貴人の身辺を世話する者、貴人の外出の際に警護する者。

＊3　女御＝天皇の后の名称のひとつ。ここでは入内前の、中将の妹の姫君のこと。

＊4　六位の進＝中将の侍の呼び名。

＊5　上童＝ここでは姫君に仕える少女。

問一　左大臣に遣わされて清水寺に向かう中将殿のようすはどのようだったか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　清水寺に遣わされた中将殿は、身支度や供の者の準備に手間取り、しばらくしてから仰々しい行列で出かけ、往来を行き交う人々が右往左往するような事態となった。

b　清水寺に遣わされた中将殿は、行列を整えてあわただしく出かけたところ、何事が起ったのかと、かえって妹の姫君一行を不安がらせるという事態となった。

c　清水寺に遣わされた中将殿は、顔や身なりをうつくしくととのえて、供の者を大勢従えた仰々しい行列を仕立てたため、参詣する人々は驚いて目を見張ってしまうという事態となった。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

d　清水寺に遣わされた中将殿は、少人数だがいかめしい行列を整えて出かけたので、清水寺に参詣していた人々はその行列のものものしさに驚いて、早々に帰ってしまうという事態となった。

e　清水寺に遣わされた中将殿は、一人で目立たない身なりにやつし、供の者も従えず、ひそかに寺を訪れたので、事情を知らない人々は、最初はだれが来たのかわからないという事態となった。

問二　急に時雨が降ってきたとき、中将殿はどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　多くの参詣人にまぎれていた十五、六歳のうつくしい姫君を、四、五人の女房たちがぬらさないように隠していたところ、中将殿の供の侍がこのようすを告げたので、その者がさしていた傘を姫君に貸してさしあげるよう命じたところ、これを見上げた姫君のかわいらしくもまたうつくしい姿を目にした。

b　多くの参詣人にまぎれていた十五、六歳のうつくしい姫君を、四、五人の女房たちがぬらさないように隠していたところ、中将殿がこのようすを見て、自分がさしていた傘を直接貸してあげようとなさったとき、これを見上げた姫君のかわいらしくもまたうつくしい姿を目にした。

c　多くの参詣人にまぎれていた十五、六歳のうつくしい姫君を、四、五人の女房たちがぬらさないように隠していたところ、中将殿がこのようすを見て、供の者がさしていた傘を、姫君に仕えている別の女房を通じて貸してあげようとしたとき、これを見上げた姫君のかわいらしくもまたうつくしい姿を目にした。

d　多くの参詣人にまぎれていた十五、六歳のうつくしい姫君を、四、五人の女房たちがぬらさないように隠していたところ、中将殿がこのようすを見て、自分がさしていた傘を、供の侍を通じて貸してあげようとしたとき、これを見上げた姫君のかわいらしくもまたうつくしい姿を目にした。

e　多くの参詣人にまぎれていた十五、六歳のうつくしい姫君を、四、五人の女房たちがぬらさないように隠していたところ、中将殿が、自分がさしていた傘を、中将を案内していた寺僧を通じて貸してあげようとしたとき、これを見上げた姫君のかわいらしくもまたうつくしい姿を目にした。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問三　姫君の一行に傘を貸し与えたのち、事態はどうなったのか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　姫君の一行に傘を貸し与えたのち、中将殿は雨にぬれながら、貸した傘が返されてきたとき、「傘を貸した者たちはどこにいるのか」と尋ねると、まだそこに立っているというので、すぐに見にやらせたところ、すでにその場所にはいなかったが、中将殿は、傘を貸した姫君のことが気がかりだったので、寺で一夜を明かすことになった。

b　姫君の一行に傘を貸し与えたのち、中将殿は雨にぬれながら、貸した傘が返されてきたとき、「傘を貸した者たちはどこにいるのか」と尋ねると、まだそこに立っているというので、すぐに供の者に見にやらせたところ、すでにその場所にはいなかった。一方、姫君のほうもだれが傘を貸してくれたのかわからなかったので、その正体が知りたくて寺で一夜を明かすことになった。

c　姫君の一行に傘を貸し与えたのち、中将殿は雨にぬれながら、貸した傘が返されてきたとき、「傘を貸した者たちはいったいどこに行ったのか」と尋ねると、まだそこに立っているというので、すぐに見にやらせたところ、すでにその場所にはいなかったが、中将殿は、妹の姫君のようすが気になって、寺で一夜を明かすことになった。

d　姫君の一行に傘を貸し与えたのち、中将殿は雨にぬれながら、貸した傘が返されてきたとき、「傘を貸しに行った者たちはどこにいるのか」と尋ねると、まだそこに立っているというので、すぐに使いの者をやったところ、すでにその場所からどこかへ行ってしまったようで、その者たちを探すうちに夜になってしまい、中将殿はやむをえず寺で一夜を明かすことになった。

e　姫君の一行に傘を貸し与えたのち、中将殿は雨にぬれながら、貸した傘が返されてきたとき、「傘を貸した者たちはどうしているか」と尋ねると、まだそこに立っているというので、すぐに見にやらせたところ、すでにその場所にはいなかったが、中将殿は、姫君の兄君から派遣された使者だということを口実にして、寺で一夜を明かすことになった。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問四　姫君の一行が清水寺に参籠（ろう）しているとき、中将殿はどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　中将殿は、隣の局に誰か参籠している気配がするので気になって覗こうとしたが、局の内側には目隠しの布がところどころに引きめぐらしてあり、すこし見通しが悪かったので、柱の節の穴に貼られた紙の札をはがして、そこから中のようすをうかがった。

b　中将殿は、隣の局に参籠している人に、寺僧が参籠の規則を告げているのが聞こえてきたので、気になって覗こうとしたが、局の周囲が目隠しの布で覆われていて見るすべもなかったので、柱の節の穴をふさいでいる紙を引きぬいて、そこから中のようすをうかがった。

c　中将殿は、隣の局に上品な女性が参籠している気配なので、気になって覗こうとしたが、局の内部は間仕切りの布が垂れ下げてあり、まったく見通しがきかなかったので、紙でふさがれている柱の節の穴を見つけ、その紙をはがして、そこから中のようすをうかがった。

d　中将殿は、隣の局にいる人が他の参詣の人々を避けているような気配なので、気になって覗こうとしたが、局には目隠しの布が引きめぐらしてあり、見られることをひどくいやがっているようなので、柱の節にむりやり穴をこじあけて、そこから局のようすをうかがった。

e　中将殿は、隣の局に誰か人目を避けて参籠している気配がするので、気になって覗こうとしたが、局には部屋を仕切る布が目隠しのようにめぐらしてあり、見るすべもなかったので、柱の節の穴をふさいでいる紙を引きぬいて、そこから局のようすをうかがった。

問五　参籠する姫君のようすに対して、女房たちはどういったか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　姫君が、時雨にぬれた衣装を脱いで、夜具に寄りかかって伏せっていらっしゃったところ、女房が巻き貝をすりだした硯箱のふたに菓子や果物を置いて勧めたのだが、姫君は目もくれず嫌そうなようすでなにもおっしゃらないので、女

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

房は、「またいつものわがままがはじまった、もう何も申し上げません」といった。

b　姫君が、時雨にぬれた衣装を脱いで、夜具に寄りかかって伏せっていらっしゃったところ、女房が巻き貝をすりだした硯箱のふたに菓子や果物を置いて勧めたのだが、姫君は目もくれず嫌そうなようすでなにもおっしゃらないので、女房は、「またいつもの気ふさぎがはじまった、せめて私たちの苦労をご理解くださってもよいのに」といった。

c　姫君が、時雨にぬれた衣装を脱いで、夜具に寄りかかって伏せっていらっしゃったところ、女房が巻き貝をすりだした硯箱のふたに菓子や果物を置いて勧めたのだが、姫君は目もくれず嫌そうなようすで、女房がどのように申し上げても返事すらなさらないので、女房は、「またいつものように面倒なことになった、召し上がってくださいませ」といった。

d　姫君が、時雨にぬれた衣装を脱いで、夜具に寄りかかって伏せっていらっしゃったところ、女房が巻き貝をすりだした硯箱のふたに菓子や果物を置いて勧めたのだが、姫君は目もくれず嫌そうなようすなので、女房はうとましく思い、「またいつもの不機嫌がはじまった、たまには私たちに気をつかって召し上がってくだされればよいのに」といった。

e　姫君が、時雨にぬれた衣装を脱いで、気分が悪いといって夜具に寄りかかっておられたので、女房が巻き貝をすりだした硯箱のふたに菓子や果物を置いて勧めたのだが、姫君は目もくれず、返事するのもけだるそうになさるので、女房は、「雨にぬれたせいで、また風邪がぶり返しなされたのでしょう」といった。

問六　夕暮れどきに、姫君一行のようすを見て、中将殿はどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　日も暮れかかって、参拝をはじめようというので、幼いために参拝できない少女だけをのこして、姫君と女房たちは連れだって礼拝に出て行ったそのすきに、中将殿はちょうどよい機会だと喜んで、上品な香りをたきこめた美しい薄手の紙に手紙を書いて送ろうとした。

b　日も暮れかかって、参拝をはじめようというので、お仕えの少女一人を姫君の話し相手にのこして、女房たちは連れだって礼拝に出て行ったそのすきに、中将殿はちょうどよい機会だと喜んで、紅葉の色を重ね合わせた、とりわけ美しい薄手の紙に手紙を書いて送ろうとした。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

c　日も暮れかかって、参拝をはじめようというので、お仕えの少女一人を案内に先立てて、女房たちは連れだって礼拝に出て行ったそのすきに、中将殿はちょうどよい機会だと喜んで、香り高い美しい薄手の紙に手紙を書いて送ろうとした。

d　日も暮れかかって、参拝をはじめようというので、姫君は、お仕えの少女一人を局の留守番にのこして、女房たちを伴って礼拝に出て行ったそのすきに、中将殿はちょうどよい機会だと喜んで、紅葉のように色とりどりの紙を貼りまぜた美しい薄手の紙に手紙を書いて送ろうとした。

e　日も暮れかかって、参拝をはじめようというので、お仕えの少女数人を姫君の世話係にのこして、女房たちは連れだって礼拝に出て行ったのと入れ違いに、先に参拝をすませた中将殿は、紅葉をかたどった金箔を貼り付けた美しい薄手の紙に手紙を書いて送ろうとした。

問七　中将殿は、「たまぼこの」という和歌にどのような恋心を託したのか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　手紙に歌だけを書きつけて送って、寺に来る道すがらお姿をお見かけして、たちまちあなたの美しさにとりこになって、ふたりの縁を思わずにはおれませんでした、という恋心をうたった。

b　いきなり歌を送ってこられて、ことばをなくしてしまったのですが、寺に来る道の途中ですれ違ったお方があなただとわかって、あなたとの縁がこれほど深いものとは思いもかけないことでした、という恋心をうたった。

c　なんの前書きもつけずに歌だけを書きつけて送って、寺に来る道すがら遠目にお見かけしたときよりも、こうしておそばでお見受けするといっそう美しく見え、あなたとの縁がこんなにも急に進展するとは思いもかけないことでした、という恋心をうたった。

d　なんの前書きもつけずに歌だけを書きつけて送って、寺にお参りする道すがらお見かけしてからというもの、あなたとの縁が前世からの深いものだったのだとはお思いになりませんか、という恋心をうたった。

e　直接お話することがかなわないので、歌を送ることしかできないのですが、あなたは多くの参詣者のなかで、だれよりも美しいので、たちまち心ひかれることになってしまいました、という恋心をうたった。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問八　和歌を送られた姫君は、そのあとどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　使いの者から、時雨が降ってきたとき傘を差し出した人からの手紙だと告げられて、姫君はものも言わずそれを見ていたが、「きっと人違いです、無礼は許しません」と言って、手紙に触れようともせず、使いの者に返そうとしたが、使いの者が「それでは私が困ります」と言って受け取ろうとしないので、使いの者に「それなら捨ててしまいなさい」と命じて、軒下を流れる雨水にうち捨てさせた。

b　使いの者から、時雨が降ってきたとき傘を差し出した人からの手紙だと告げられて、姫君はその手紙を取り次いだ上童にそれを持たせたまま手紙を開けもせずじっと見ていたが、「きっと人違いです、思い当るところがありません」と言って、手紙に触れようともせず、使いの者に返すように上童に指示したが、使いの者が「つれないことです」と言って受け取ろうとしないので、上童に「それなら捨ててしまいなさい」と命じて、軒下の雨の落ちるところにうち捨てさせた。

c　使いの者から、時雨が降ってきたとき傘を差し出した人からの手紙だと告げられて、姫君は使いの者に持たせたまましばらくじっと見ていたが、「きっと人違いです、思いもよらぬ失礼なことです」と言って、手紙に触れようともせず、使いの者に持ち帰るように指示したが、使いの者は無礼にも姫君の指示に従わないので、姫君はそばにいた女房に「それなら捨ててしまいなさい」と命じて、軒下の雨の落ちるところにうち捨てさせた。

d　使いの者から、時雨が降ってきたとき傘を差し出した人からの手紙だと告げられて、姫君は、取り次いだ上童に持たせたまましばらくじっと見ていたが、「きっと人違いです、思い当るところがありません」と言って、手紙に触れようともせず、女房に返すように指示したが、あきれたことに使いの者が持ち帰ることを拒んだので、姫君は「それなら捨ててしまいなさい」と女房に命じて、軒下の雨の落ちるところにうち捨てさせた。

e　使いの者から、時雨が降ってきたとき傘を差し出した人からの手紙だと告げられて、姫君は手紙を開けもせずしばらくじっと見ていたが、「きっと人違いです、思い当るところがありません」と言って、手紙に触れようともせず、手紙の主に返すように使いの者に指示したが、使いの者が「そんな無愛想な」と言って受け取ろうとしないので、上童に「それなら捨ててしまいなさい」と命じて、軒下にたまった雨水にうち捨てさせた。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問九　波線部（A）を現代語訳せよ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第一講　復習問題

① 次の文章を読んで後の問に答えよ。

〈中略〉簾(すだれ)巻き上げて、三十(みそぢ)に今ぞ及ぶらむとおぼゆるほどなる人、高欄(かうらん)のもとにて和琴(わごん)を弾くあり。頭(かしら)つき、様体(やうだい)ほそやかに、しなしなしく、きよらなるに、髪のいとつややかにゆるゆるとかかりて、めやすき人かな、と見ゆるに、向かひざまにて、紅(くれなゐ)か二藍(ふたあゐ)かのほどなめり、いと白く透きたる好ましげなる人、すべり下りて、長押(なげし)に押しかかりて、外ざまをながめ出でて、琵琶(びは)にいたく傾(かたぶ)きかかりて、かき鳴らしたる音(ね)、聞くよりも、うちもてなしたる有様、かたち、いと気色ばみ、なつかしくなまめき、こぼれかかれる額髪(ひたひがみ)の絶え間のいと白くをかしげなるほどなど、まことしく優なるものかな、と見ゆるに、…（以下略）。

問1　中納言が垣間見た和琴を弾く人とはどのような人であったのか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　三十に手が届くかと思われる人で、髪の様子や姿がほっそりとして、なよなよとして清潔そうで、髪がたいそうつややかでゆったりとかかり、感じのよい人であった。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

b　三十に手が届くかと思われる人で、髪の様子や姿がほっそりとして、気品があって美しい上に、髪がたいそうつややかでゆったりとかかり、感じのよい人であった。

c　三十に手が届くかと思われる人で、髪の様子や姿がほっそりとして、お上品ぶって近づきにくく、髪がたいそうつややかでゆったりとかかり、いささか感じの悪い人であった。

d　三十に手が届くかと思われる人で、髪の様子や姿がほっそりとして、品がなく澄まし顔で、髪がたいそうつややかでゆったりとかかり、いささか感じの悪い人であった。

e　三十に手が届くかと思われる人で、髪の様子や姿がほっそりとして、なまめかしく派手で、髪がたいそうつややかでゆったりとかかり、感じのよい人であった。

問2　中納言が垣間見た琵琶を弾く人とはどのような人であったのか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　たいそう色白で透き通るような美人で、かき鳴らした琵琶の音色を聞くとすぐに身のこなしや容姿が際立ち、いかにもなつかしくあでやかな人であった。

b　たいそう色白で透き通るような美人で、かき鳴らした琵琶の音色を聞くとすぐに身のこなしや容姿が際立ち、いかにも幼さの中にも大人っぽさを秘めた人であった。

c　たいそう色白で透き通るような美人で、かき鳴らした琵琶の音色を聞くとすぐに身のこなしや容姿が際立ち、いかにも人なれして若わかしさにあふれた人であった。

d　たいそう色白で透き通るような美人で、かき鳴らした琵琶の音色を聞くとすぐに身のこなしや容姿が際立ち、いかにも親しみ深く物静かで優雅な人であった。

e　たいそう色白で透き通るような美人で、かき鳴らした琵琶の音色を聞くとすぐに身のこなしや容姿が際立ち、いかにも近づきやすく庶民的な人であった。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

② 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

（中納言）「この竹の中に隠れて」といひて、帰り入りて見たまへば、…〈中略〉…いと静やかなるに、（中納言）「ゆくりなくあはつけき振舞は、おのづから軽がろしきことも出でくるを」と、ありがたくおぼしをさめたる心なれど、我ながらあやしく鎮めがたきを、…（以下略）。

問 竹の中に身を隠していた中納言の心中はどのようなものであったのか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　計画通りの慎重な行動をするつもりでも、時には軽がるしいことも起こってくるから、と万事に思慮深い中納言ではあったが、今夜に限っては自分でも不思議なくらい心が鎮めがたい、と感じていた。

b　だれが見ても自己中心的な行動は、時にまわりの人たちに迷惑をかけることも起こってくるから、と何ごとにつけ遠慮深い中納言ではあったが、今夜に限っては自分でも不思議なくらい心が鎮めがたい、と感じていた。

c　突然の軽はずみな行動は、自然と身分にふさわしくないことも起こってくるから、と普通には見られないほどの自制心を持った中納言であったが、今夜に限っては自分でも不思議なくらい心が鎮めがたい、と感じていた。

d　時にはすばやい振る舞いをしなければせっかくの機会をのがしてしまう、といつもはのんびりとした行動をする中納言であったが、今夜に限っては自分でも不思議なくらい心が鎮めがたい、と感じていた。

e　好奇心にかられた発作的な行動は、時には不都合なことも起こってくるから、といつもは小心で大胆な行動のできない中納言ではあったが、今夜に限っては自分でも不思議なくらい心が鎮めがたい、と感じていた。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第二講『松陰中納言』　同志社大学

次の文章は、松陰大臣の娘である女御が、帝の御子を出産する直前の様子を描いたものである。これを読んで、後の設問に答えよ。

女御の御産の頃も近づかせ給ひければ、「松陰殿に渡り給ひなん」とのたまはすれども、一夜がほども隔て給はんことをただに思して添ひおはしましければ、「内裏にては忌むなることを」とて、南殿の御会におはしましけるままに、人々はかりて御車に奉らす。

四条京極あたりを過ぐさせ給ひけるほどに、御簾の下よりあやしき風の吹き入りけるに、御心地の乱りがはしくならせ給ひて、いとたうなやませ給ひけるに、御供のかぎり、足をそらにして慌て迷ふ。「されど、ここもとにてはいかがはせ[1]ん。御車を急ぎて」と、言ひののしる。からうして[ア]入れ奉るに、大臣も門の外まで出で給うて、「こはいかにせん」とて、共に御心も乱るるほどに思すれど、降ろし奉りて、御枕を離れ給はねども、我かの御気色のいとまさらせ給へば、「上に奏し奉らんも、さこそ御気色のおはしますらん」と、恐れ給へらるれども、「[A]さてやは、やまん」とて、告げさせ給ひければ、「さ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ればよ。御名残のつきすまじきにてありつるは、かかることにてこそあらめ」など、その際を知らせて、「[B]誰がはからひにかありつる。我も行かではえあるまじけれ」と、おどろおどろしく騒がせ給へれど、「軽々しき行幸は、世の人の思は[2]んこ
とも候ふなれば」とて、世に数へらるるほどの尊き僧たち、陰陽の司、御宝の剣などを遣はさる。夜も昼も御使ひの行き交ふさまは、いとあわただし。

御修法の声、絶ゆる間もなく、護摩の煙の立ちさらでも、いささかの御験だに見えさせ給はねば、島より伴ひ給ひし阿闍梨の、須磨より帰り給はんとのたまへるを、「ここまでいまして、故郷を見給はぬことやある」と相具し給へるを、賀茂川の御堂に据ゑさせてありけるを召し給ひて、かかる御悩みに見るめも暗くなりて、[C]共に絶え果つべき心地のし給ふなり。さもおはせば、御後の世までも心の闇に迷ひぬべければ、灯火となりぬべき御わざのことまで[イ]沙汰しのたまひて、御涙ぐませ給へば、阿闍梨も「よよ」と泣き給うて、「[a]ただならぬ御身の上には、物の怪などの付き添ふためしのいと多く候ふなり。さあら[3]んには、尊き僧たちのあまたましまさんには、やがてそれと知られ給はんものを、日にそひて[b]あつしく悩ませ給ふら[4]んこそ心得られね。いかにしふねき魂なりとも、名告り（なの）をせんほどのしるしはありな[5]ん。されども、世に数ま

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

へられぬ身の、やんごとなき中に出でまじらはんも、目立つべかめれば、物を隔てて御声をだに聞かましかば」とのたまはすれば、「何かは」とて召し具し給うて、御屏風を隔て据ゑさせ給ひけるに、あやしき御声の折々うち咳かせ給へれば、「さればよ」と思す。

（『松陰中納言』）

注

松陰殿　女御の父、松陰大臣の邸。
内裏にては忌むなること　宮中での出産は穢れとしてはばかられた。
南殿の御会　宮中の紫宸殿で行われる宴。
御宝の剣　安産守護のための剣。
島より伴ひ給ひし阿闍梨　松陰大臣が、隠岐島から連れてきた高徳の僧。
心の闇　「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな」（『後撰集』）に依拠した表現。
灯火となりぬべき御わざのこと　死んでしまった時の葬儀の準備。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問一　傍線部a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選べ。

a　ただならぬ

1　身分の高い　2　妊娠している
3　里帰りしている　4　悲しみに暮れている
5　うらやましがられている

b　あつしく

1　情愛が深く　2　信仰心が強く　3　気温が高く
4　動揺が激しく　5　容態が重く

問二　傍線部ア「入れ」、イ「沙汰し」、ウ「召し具し」の動作主として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選べ。なお、同じ番号をくり返し用いてもよい。

1　女御　2　御供　3　大臣　4　上（帝）　5　阿闍梨

ア＝　イ＝　ウ＝

問三　波線部「あらめ」の「め」と文法的意味が同じものを、本文中の波線部1〜5のうちから一つ選べ。

1　いかがはせん　2　思はんことも　3　さあらんには
4　悩ませ給ふらんこそ　5　ありなん

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問四　傍線部Ａ・Ｂの解釈として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選べ。

Ａ　さてやは、やまん

1　女御が危篤になったことを、帝にこのままお知らせしないでおくことはできないだろう
2　女御が危篤になったとしても、帝にこのままお知らせしないでおくことにしよう
3　女御が危篤になったときには、このまま帝のお考えに従うことにしよう
4　女御が危篤になった以上は、帝はこのまま放っておくようなことはなさらないだろう
5　女御が危篤になったからといって、このまま死んでしまうとは帝もお思いにならないだろう

Ｂ　誰がはからひにかありつる

1　女御の里帰りが邪魔されたのは、いったい誰の差し金だったのか
2　私を宮中から出さないように画策したのは、大臣の他には誰もいないに違いない
3　女御を宮中から退出させたのは、いったい誰の策略だったのか
4　私の立場を気遣ってくれる人は、大臣の他には誰もいないに違いない
5　女御が松陰殿に里帰りできたのは、いったい誰のお陰だと思っているのか

問五　傍線部Ｃ「共に絶え果つべき心地のし給ふなり」の説明として適当なものを、次のうちから一つ選べ。

1　阿闍梨は、女御の容態を心配する大臣の親心を知って同情し、まるで女御が自分の娘であるかのように思われて、大臣と同様、死んでしまいそうなほど心配した。
2　大臣は、帝が遣わした尊い僧たちの修法によっても女御が快復しない時は、出家して、阿闍梨と一緒に消息を絶ってしまおうと決意した。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

3　阿闍梨は、女御の命を救うために身代わりになろうとする大臣に心を打たれ、帝が遣わした尊い僧たちと協力して、自分も命が尽きるまで修法しようと決意した。

4　大臣は、死にそうになっている女御を見て、このまま死んでしまったらどうしようと気が気ではなく、女御と一緒に死んでしまいそうなほど心配した。

5　女御は、大臣があまりにも女御の病を心配するのを見て、もし自分が死んでしまったら大臣も一緒に死んでしまうのではないかと心配した。

問六　本文の内容に合致するものを、次のうちから二つ選べ。

1　帝は、出産間近の女御と、一夜も離れず一緒にいたいと思った。

2　松陰大臣は、四条京極あたりで女御が急に気を失った時も、冷静に対処した。

3　女御は、宮中から松陰殿に退出したことを、帝に申し訳なく思っていた。

4　帝は、女御のいる松陰殿には行かなかった。

5　帝から松陰殿に遣わされた僧は、霊験あらたかな修法によって女御の命を救った。

6　阿闍梨は、尊い僧の修法の声を聞き、自分も修行に専念したいと思った。

問七　二重傍線部について、「『さればよ』と思す」とはどういうことか、具体的に説明せよ（句読点とも三十字以内）。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第二講　復習問題

①「思ひなしにや、…」の傍線部と文法的意味・用法が同じものを、次の中から一つ選べ。

イ　みな人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。
ロ　ここだくも狂ひに狂ひ思ほゆるかも
ハ　火の中にうちくべて焼かせたまふに、めらめらと焼けぬ
ニ　鬢は失せにたれば、ひたぶるになし
ホ　あづまの方にすむべき国もとめにとて行きけり

②「いづくにか」の後に省略されているものを、次の中から一つ選べ。

イ　来める　　ロ　あらん　　ハ　参らばや　　ニ　あらじ　　ホ　多かりし

③「こよなくおこたりざまに見ゆる」の解釈として、もっとも適当なものを次の中から一つ選べ。

イ　乳母は、一段とやせ細って全く別人のように見える
ロ　乳母は、とても怠けてくらしているように見える
ハ　乳母は、ずいぶんと病気がよくなっているように見える
ニ　乳母から見ると、都を離れている間に私はすっかり田舎っぽくなったようだ
ホ　乳母から見ると、私以上に怠惰な人間はいないように思えるらしい

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

④「帰寂したらんにはしかず」の解釈として、もっとも適当なものを次の中から一つ選べ。

イ　命を捨てたであろうと推測して、それには間違いがない
ロ　命を捨てようと決心して、それに迷いがない
ハ　命を捨てようと決心して、それが周囲に知られることはない
ニ　命を捨てるならば、それに優ることはない
ホ　命を捨てるならば、それほど愚かなことはない

⑤「あればこそ」の文法的説明として適当なものを、次のうちから一つ選べ。

イ　動詞「あり」の未然形＋逆接確定を表す接続助詞「ば」＋詠嘆の間投助詞「こそ」
ロ　動詞「あり」の未然形＋順接仮定条件を表す接続助詞「ば」＋強意の係助詞「こそ」
ハ　動詞「あり」の已然形＋順接仮定条件を表す接続助詞「ば」＋強意の係助詞「こそ」
ニ　動詞「あり」の已然形＋順接確定条件を表す接続助詞「ば」＋強意の係助詞「こそ」
ホ　動詞「あり」の未然形＋順接確定条件を表す接続助詞「ば」＋強意の副助詞「こそ」

⑥「さればよ」の意味として、もっとも適当なものを次の中から一つ選べ。

イ　かえってよ　ロ　こまったな　ハ　さようなら　ニ　なきたいわ　ホ　やっぱりね

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第三講『落窪物語』　関西学院大学

次は『落窪物語』の一節である。継母にいじめられている落窪の君のもとに、ひそかに右近の少将が通い始めた。数日通った後、内裏に出仕したために姫君を訪問できなかった右近の少将は、お詫びの手紙を贈った。これを読んで、後の問に答えなさい。

その夜は内裏に参り給ひて、えおはせず。①つとめて御文あり。「昨夜(よべ)は内裏に参りてなむ、え参り来ずなり。いかに、*あこぎ、*惟成勘当(これなりかんだう)侍りけむと思ひやりしもをかしうこそ。さがなさは②誰(た)がを習ひたるにかと思ふにも、恐ろしうなむ。今宵は③「昔はものを」となむ。

さらでこそそのいにしへも過ぎにしを一夜経にけることぞかなしき

つつましきことのみ多う[a]思されためる世は離れ給ひぬべしや。④心やすき所求めてむ」とこまやかに聞こえ給へり。

「御返り早(は)や」とて、「持て参らむ」と帯刀(たちはき)聞こゆ。⑤御文を、あこぎ見て笑ふ。「わろう語り申してけり」と、「言ふべき人のなきままにこそ、*いさかはれ侍れ」と言ふ。

「昨夜は、*まだき時雨(しぐ)るる。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

一筋に思ふ心はなかりけりいとど憂き身ぞわく方もなき

まこと、「⑥憂き世は門(かど)させりとも」と言ふやうに出でがたくなむ。あこぎは、罪あらむ人は怖ぢ給ひぬべかめり」とあるを持ちて出づるほどに、「*蔵人(くらうど)の少将、まづ b召す」と言ふめれば、え置きあへで懐にさし入れて参りたり。御鬢(びん)参らせ給はむとてなりけり。御後ろを参るとて、君もうつ伏し我もうつ伏したるほどに、懐なる文の落ちぬるもえ知らず。少将見つけ給ひて、ふと取り給ひつ。御鬢掻き果てて入り給ふに、⑦いとをかしければ、*三の君に「これ見給へ。惟成が落としたりつるぞ」とて c奉り給ふ。「⑧手こそいとをかしけれ」とのたまふ。「落窪の君の手にこそ」とのたまふ。少将、「とは誰をか言ふ。⑨あやしの人の名や」。「さ言ふ人あり。物縫ふ人ぞ」とてやみぬ。三の君は、文取り給ひて、あやしと思ひ居給へり。

帯刀、御泔(ゆする)の調度など取り置きて、立つとて掻い探るに、なし。心騒ぎて立ち居振るひ、紐解きて求むれど、絶えてなければ、いかになりぬらむと思ひて、顔赤めて居たり。ここよりほかに歩(あり)かねば、落つともここにこそあらめとて、御座(おまし)をまづ取り上げて振るへども、いづこにかあらむ。人や取りつらむ、いかなること出で来むと思ひ嘆きて、頰杖(つらづゑ)をつきてほれて居たるを、少将出づとて見給ひて、「など惟成はいたうしめやぎたる。物や失ひたる」とて笑ひ給ふに、この君取り隠し給へるなめりと思ふに

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

死ぬる心地す。⑩いとわりなげなる気色にて「いかで賜はり侍(d)らむ」と申せば、「我は知らず。⑪姫君こそ「*末の松山」と言ひつめれ」とて出で給ひぬ。

言はむ方なくて、あな若(わか)、と思はむこと恥づかしけれど、いかがはせむとて、あこぎがもとに行きて、「ありつる御返り、みづから参らむに持て参らむとて出でつるほどに、しか召して御鬢掻かせ給へるほどに、かうして取られ奉りぬ。いといみじうこそ」と我にもあらぬ気色にて言へば、あこぎ、「いといみじきことかな。いかなる⑫ののしり出で来むとすらむ。⑬いとどしく、この御方気色ありと疑ひ給ふものを、⑭いかに騒がれ給はむとすらむ」と、二人、汗になりていとほしがる。

三の君、この文を北の方に「しかじかしてありつる」とて見せ奉り給へば、「さればよ。気色ありと見つ。誰ならむ。帯刀が住むにやあらむ、そが持たりつらむは。「迎へむ」と言ひたるにこそあめれ、⑮「出でがたし」と言へるは。男逢はせじとしつるものを、いとくちをしきわざかな。男出で来なば、かうてよにあらじ。迎へむ。⑯なくては大事(だいじ)なり。よき吾子(あこ)たちの使ひ人と見置きたりつるものを。いかなる盗人のかかるわざをし出でつらむ。まだきに言はば隠し惑はむものぞ」。この文も出ださせで気色を見るに、人も言ひ騒がねば、あやしう思ふ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

（注）
＊あこぎ…落窪の君の女房。継母に命ぜられて、継母の実の娘である三の君にも仕える。帯刀の恋人。
＊惟成…帯刀の本名。蔵人の少将に仕える。右近の少将の乳母の子で、あこぎの恋人。落窪の君に右近の少将を手引きする。
＊いさかはれ侍れ…あこぎが帯刀と、自然と言い争ってしまう、ということ。
＊まだき時雨るる…「わが袖にまだき時雨の降りぬるは君が心にあきや来ぬらむ」（『古今集』恋五）を踏まえる。
＊蔵人の少将…継母の娘である三の君の夫。
＊三の君…継母の娘。落窪の君の異母姉妹。
＊末の松山…「君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波も越えなむ」（『古今集』東歌）を踏まえる。

問一　傍線部①・⑧・⑫・⑬の語句の意味として、最も適当なものを次のイ～ホからそれぞれ一つずつ選べ。

①「つとめて」
イ　一生懸命　ロ　宿直先から　ハ　仏道修行の折
ニ　努力して　ホ　翌朝

⑧「手」
イ　腕　ロ　奏法　ハ　てのひら
ニ　筆跡　ホ　縫い方

⑫「ののしり」
イ　大騒ぎ　ロ　派手な振舞い　ハ　罵倒
ニ　乱暴　ホ　悪口

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

⑬「いとどしく」
イ　あまりにも　　ロ　そのまま　　ハ　性悪にも
ニ　何度も　　ホ　ますます

問二　傍線部②「誰がを習ひたるにか」の現代語訳として最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　誰の奥ゆかしさを見習ったのか
ロ　誰の性悪振りを見習ったのか
ハ　誰の裁縫の技術を習ったのか
ニ　誰かが習い事をしているのか
ホ　誰が習っているのか

問三　傍線部③「『昔はものを』となむ」の「昔はものを」とは「逢ひみての後の心にくらぶれば昔はものを思はざりけり」（『拾遺集』恋二・藤原敦忠）という歌の一節である。これを踏まえて、傍線部③の解釈として最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　あなたと逢えなくなるかもしれないと思うと、まだあなたを知らなかった幸せな時間が懐かしいくらいだ
ロ　あなたと逢う前の悩みに比べれば、今夜だけあなたに逢えない悩みなどたいした苦しみとはいえないほどだ
ハ　あなたにまた逢える日までの時間は、これまで味わった事がないくらいに新鮮で、まことに楽しみなことだ
ニ　あなたに逢った後に逢えない夜を過ごす物思いの深さは、これまでの物思いなど取るに足らないほどだ
ホ　あなたに逢っても思いが伝わらず苦しむくらいならば、いっそもともと逢えなかった方がよかったくらいだ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問四　二重傍線部ａ「思さ」、ｂ「召す」、ｃ「奉り」、ｄ「侍ら」は誰に対する敬意を表しているか。次のイ〜トから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選べ（同じ符号を何回用いてもよい）。

イ　落窪の君　ロ　右近の少将　ハ　あこぎ　ニ　帯刀（惟成）
ホ　蔵人の少将　へ　三の君　ト　継母

ａ＝　ｂ＝　ｃ＝　ｄ＝

問五　傍線部④「心やすき所求めてむ」の現代語訳として最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　縁のある場所に世話になろう
ロ　安心して泊まれる宿を見つけよう
ハ　静かな寺院に身を隠そう
ニ　気兼ねのいらない所を探そう
ホ　立派な御殿に移り住もう

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問六　傍線部⑤「御文を、あこぎ見て笑ふ」とあるが、あこぎはなぜ笑ったのか。その理由として最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　少将があこぎをわざと悪者にしているから
ロ　少将があこぎにひたすらに追従しているから
ハ　少将があこぎをひそかに恋慕しているから
ニ　少将があこぎに期待をこめて要望しているから
ホ　少将があこぎに救いをもとめているから

問七　傍線部⑥「憂き世は門させりとも」とは「憂き世には門鎖（さ）せりとも見えなくになどかわが身の出でがてにする」（『古今集』雑下・平貞文）という歌の一節である。これを踏まえて、傍線部⑥の解釈として最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　つらい思いをするこの家は門が固く錆び付いてしまったように
ロ　つらい思いをするこの家は門が堅く閉ざされているため
ハ　つらい思いをするこの家は門に鍵がかかっているわけではないのに
ニ　つらい思いをするこの家は門に鍵がかかっているので
ホ　つらい思いをするこの家は門の外の世界に幸福な未来があるから

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問八　傍線部⑦「いとをかしければ」とは誰のどのような気持ちか。最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　三の君の、髪を整えた蔵人の少将に心惹かれる気持ち
ロ　帯刀の、右近の少将の美貌に感動する気持ち
ハ　帯刀の、三の君の反応に期待を抱く気持ち
ニ　蔵人の少将の、髪を結えて満足する気持ち
ホ　蔵人の少将の、手紙に関心を抱く気持ち

問九　傍線部⑨「あやしの人の名や」とは、誰が、どのように思った上での発言か。最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　蔵人の少将が、意外な宛名の手紙に驚いた発言
ロ　蔵人の少将が、変な名前に興味を抱いた発言
ハ　蔵人の少将が、三の君の呼ばれ方を不快に思った発言
ニ　右近の少将が、怪しい呼び名に敏感に応じた発言
ホ　右近の少将が、落窪の君のことを疑った発言

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問十　傍線部⑩「いとわりなげなる気色」とは誰のどのような様子か。最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　あこぎの、心底怒った様子
ロ　あこぎの、どうにも焦った様子
ハ　三の君の、今にも泣きそうな様子
ニ　帯刀の、実に粗暴な様子
ホ　帯刀の、まことに切迫した様子

問十一　傍線部⑪「姫君」とは誰だと考えられるか。最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　落窪の君　ロ　あこぎ　ハ　継母　ニ　三の君　ホ　蔵人の少将の娘

問十二　傍線部⑭「いかに騒がれ給はむとすらむ」の現代語訳として、最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　どれほど落窪の君が、騒がれなさることになるでしょう
ロ　どれほど右近の少将が、騒がれなさることになるでしょう
ハ　どれほど三の君が、大騒ぎなさることになるでしょう
ニ　どれほど継母が、大騒ぎなさることになるでしょう
ホ　どれほど継母が、落胆なさることになるでしょう

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問十三　傍線部⑮「『出でがたし』と言へるは」と言ったのは、どのように推測しているからか。最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　落窪の君が「出られない」と答えているのは、男に対して愛情がないからだろう、と推測しているから。
ロ　落窪の君が「出られない」と答えているのは、継母が夫として男を迎えるつもりだろう、と推測しているから。
ハ　落窪の君が「出られない」と答えているのは、男が自分の邸に迎えようと言ったからだろう、と推測しているから。
ニ　落窪の君が「出られない」と答えているのは、継母の家での暮らしに愛着があるからだろう、と推測しているから。
ホ　落窪の君が「出られない」と答えているのは、男がまた訪ねて来ようと言ったからだろう、と推測しているから。

問十四　傍線部⑯「なくては大事なり」の具体的な内容説明として、最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　もし落窪の君が失望して亡くなりでもしたら、夫に知られた時に一大事だ
ロ　もし落窪の君がいなくなったら、裁縫のできる人がいなくなるから大変だ
ハ　もしこの手紙を無くしたら、落窪の君の体面を傷つけることになるから一大事だ
ニ　せっかく通って来始めた落窪の君の夫が来なくなったら、重大な問題だ
ホ　継母の北の方がいなくなっては、一家の切り盛りができなくなるから、この問題は重要だ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問十五　問題文の内容と合致するものを次のイ～トから二つ選べ。

イ　落窪の君は、継母に叱られるのを恐れて、右近の少将に対してつれなく振舞っている。
ロ　落窪の君は、継母の苛めから逃れるためならば、どこにでも逃げたいと思っている。
ハ　右近の少将は、継母に苛められている落窪の君のことを内心侮りつつも哀れんでいる。
ニ　蔵人の少将は、帯刀が右近の少将の手紙を無くして動揺しているのを見て、楽しんでいる。
ホ　あこぎは、落窪の君と右近の少将との関係が継母に知られることを恐れている。
ヘ　帯刀は、手紙を無くしたことを、あこぎに馬鹿にされないかと懸念している。
ト　継母は、落窪の君がひそかに夫を得ていたことを知ってほっとしている。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第三講　復習問題

①　「坤（ひつじさる）のかた」が表している方角を、次の中から一つ選べ。

イ　南西　　ロ　南東　　ハ　西南西　　ニ　東南東　　ホ　南南西

②　「中ならん物」の「なら」と同じ意味で用いられているものとして、最も適当なものを次の中から選べ。

イ　心に思ふことを見るもの聞くものにつけて言ひ出だせるなり。（『古今和歌集』）

ロ　この西なる家はなに人の住むぞ、問ひ聞きたりや。（『源氏物語』）

ハ　三条の宮に、親族（しぞく）なる人の衛門の命婦とてさぶらひけるたづねて文やりたれば、（『更級日記』）

ニ　それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。（『竹取物語』）

ホ　都へと思ふをものの悲しきは帰らぬ人のあればなりけり　（『土佐日記』）

ヘ　物思へば雲居に見ゆる雁（かりがね）の耳に近くも聞こゆなるかな　（『和泉式部集』）

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

③
「しばし、みななつかはしそ」の現代語訳として、最も適当なものを次の中から選べ。

イ　しばらくの間、すべてでなくてもお与えください
ロ　しばらくの間、全部は差し上げないでおきましょう
ハ　しばらくの間、みんな送り返してしまいましょう
ニ　待ってください、すべてお与えしてはいけません
ホ　待ってください、みんな差し上げてもかまいません
ヘ　待ってください、全部お返しにならないでください

④
「方違へよ」の意味として、最も適当なものを次の中から一つ選べ。

イ　唐土の方角（西）へ行きなさい
ロ　吉方の所（家）に行きなさい
ハ　出発の儀式を行いましょう
ニ　行く方角を間違えないようにしなさい
ホ　撫子の咲いている方角へ行きましょう

⑤
「春の事ども取りいそぎ」とは、どういうことを表しているか。最も適当なものを次の中から一つ選べ。

イ　新年の挨拶まわり　　ロ　歳末の取り立て　　ハ　正月祝いの準備
ニ　衣替えの準備　　ホ　婚礼の準備

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第四講　『袋草紙』　関西大学

次の文章は、平安時代後期の歌学書『袋草紙』（藤原清輔著）の一節で、冒頭の和泉式部の和歌をめぐる問答である。これを読んで、後の問いに答えよ。

今朝はしも思はむ人はとひてましつまなきねやの上はいかにと

問ふ、「女歌にては、〈つま〉とはよみてんや。ただ、〈つまなきねや〉とよみたるは、さてはよしなうこそおぼゆれ。〈[*1]つまなきこひをわれはするかな〉といふことをおもひたるにや。それはいはれたるものを」。

答ふ、「これはいかに侍るべき事にか。ただ年ごろ知り給ひたるやうは、〈つま〉といふ事は、男女のなからひは、これかれ〈つま〉といふと知りて侍りつるなり。男は女を〈つま〉といひ、女も男を〈つま〉といふなり。女を〈つま〉といふべしとなにに見えたるにか。これは[*2]証歌多くや侍らん。まづ伊勢物語に、[*3]〈つまもこもれりわれもこもれり〉といへる歌は、女の歌にて、男のむさしのにこもりたりければ、野を焼かむとしければ、女のよみ侍りけるなり。〈つまもこもれり〉とは、われが男をいへるなるべし。〈われもこもれり〉とは、女のことにや」。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

なほ問ふ、「のたまはせたること、いはれたり。世に*4歌枕とて侍るめるに、多くは女（め）を〈つま〉といふ。もしはまた、〈わかくさ〉といふ。またある本には、のたまはするやうに、女男（めをとこ）の中を〈つま〉といふとも書かれたるやうに覚ゆれば、いづれか一定ならむとも申しがたし。さて伊勢物語は、その歌の心を案じ侍るに、もしかきたがへたるにや。また女の男にかはりたるにや、とも思ひたまふるなり。その故はこれ、男、人のむすめをぬすみて、むさしへゐてくるほどに、ぬす人なりければ、国の守（かみ）にからめられにけり。女をばくさむらの中におきていにければ、みちゆく人、〈この野はぬす人あなり〉とて火をつけんとするに、女のよむと書かれて侍るめり。されば、ふたりながらこもれりとは見え侍らず。これ先の歌にたがひたり。また、〈わかくさの〉といふは、男のことばにてこそいはれてはべらめ、女のたちまちに男をわかしといはんもいはれず。また、〈わかくさ〉といふ事は、妻をいふとはべめれば、〈あしひきのやま〉〈あらたまのとし〉などいふやうに、〈わかくさのつま〉などはよまれて侍るにこそあめれ。またこの歌を古今に、〈題、よみ人しらず〉と書きて、〈かすがの〉と直されてはべめれば、これにつけてもうたがひのこれるなり。*5日本紀に、すさのをの〈いづもやへがきつまごめに〉とよみ、また*6明日天皇の皇后に送る歌に、〈あひおもふつま〉とよみてはべるは。また万葉には、よろづのこと、ともかうも書かれて侍るものなれば、さだめがたう侍れど、

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

〈妻〉と書きて〈つま〉とよみ、また〈嬬〉をも〈孋〉をも〈つま〉とこそはよみて侍るめれ。されば*7字書に、「妾（せふ）の義なり」とこそ釈せられてはべれ。さだまらずといひながら、さすがに〈春〉の字を〈秋〉とよみ、〈雪〉を〈霞〉とはよまれはべらぬものをば。所の名にも、〈朝妻〉〈吾妻〉をば〈つま〉〈つま〉とこそはいひつたへて侍れ。したしきを〈つま〉とよまば、〈夫〉の字、〈父母〉〈兄弟〉の字をも、〈つま〉とよまれて侍らんや。ただし、式部はなかごろの上手に侍れば、男を〈つま〉とよみて侍れば、ゆゑ侍らん。さればひとへに難ずべきに侍らず。Ⓐ<u>ただ証歌を承りて、心のうたがひをたたばやと思ひ給ふるなり</u>」。

*8予これを案ずるに、万葉集に、松浦（まつら）佐夜姫を詠ずる歌にいはく、

とほつひとまつらさよひめつまごひにひれふりしよりおへるやまのな

かくの如きは男をも〈つま〉といふか。またいはく、

たなばたのつままつよひの秋風にわれさへあやな人ぞこひしき

かく侍れば、男をも〈つま〉といふにこそ。

（『袋草紙』による）

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

注

＊1　つまなきこひをわれはするかな＝和歌の下の句と思われるが、出典は未詳。
＊2　証歌＝和歌をよむときの根拠としてひかれるべき歌。
＊3　〈つまもこもれりわれもこもれり〉といへる歌＝上の句は、〈武蔵野は今日はな焼きそわかくさの〉。
＊4　歌枕＝和歌によくよまれる地名や歌語を集めて解説したもの。
＊5　日本紀＝日本書紀のこと。
＊6　明日天皇＝日本書紀にある「明日、天皇」を誤読したもの。
＊7　字書＝辞書のこと。
＊8　予＝著者である藤原清輔のこと。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問一　最初の質問において、冒頭の和歌のどういう点が問題にされているか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　作者が女性であるという立場から、「妻のいない寝室」とよむのはいわれがないように思われる。もしこの「つま」のことを、男女を問わず、「恋人もいないのに恋をしている」という歌を意識しているというのなら、それなりの理由があるのだが、それでは真実の恋の歌とはいえないのではないか、という疑問が述べられている。

b　作者が女性であるという立場から、「妻のいない寝室」とよむのは妥当なこととは思われない。本来「つま」とは女性に限定されるべきものなので、もし作者が男性の立場に身を置き替えてよんだとするなら、それなりの理由があるのだが、そのような理解をするのは無理があるのではないか、という疑問が述べられている。

c　作者が女性であるという立場から、「妻のいない寝室」とよむのはいわれがないように思われる。もしこの「つま」のことを、男女を問わず、「恋人もいないのに恋をしている」という歌を意識しているというのなら、それなりの理由があるのだが、女性歌人がよんだ歌において、「つま」とよむのはほんとうに妥当かどうか、という疑問が述べられている。

d　作者が女性であるという立場から、「妻のいない寝室」とよむのは妥当なこととは思われない。本来「つま」とは女性に限定されるべきものなので、この和歌の作者を女性とみるのは誤りで、男性の作であるとみるべきであり、そうならばそれなりに理由がつくのではないか、という疑問が述べられている。

e　作者が女性であるという立場から、「妻のいない寝室」とよむのはいわれがないように思われる。もしこの「つま」のことを、男女を問わず、「恋人もいないのに恋をしている」という歌を意識しているというのなら、それなりの理由があるのだが、まるで妻がいないそぶりをしているというなら、それはおかしいのではないか、という疑問が述べられている。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問二　最初の質問に対する答えはどのようなものだったか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　そもそもこの質問の趣旨がよくわからないのだが、私がただずっと前から知っていたことは、男女の間では、双方どちらからでも「つま」ということであり、女性についてだけ「つま」というべきだという説が何に出ているのか根拠がない、という答えだった。

b　そんなわかり切ったことをどうして質問されるのかがよくわからないのだが、私がただずっと前から知っていたことは、男女の間ではとりあえずお互いに「つま」といってもよいということであり、男からも、女からも「つま」というべきだという説が何に出ているのか根拠がない、という答えだった。

c　質問の趣旨をどのようにとらえてよいのかがわからないのだが、私がただずっと前から知っていたことは、男女の間では、双方どちらからでも「つま」ということだったが、男性についても女性と同じように「つま」というべきだという説が何に出ているのかはよく知らない、という答えだった。

d　これは自分でも疑問に思っていたことなのだが、私がただずっと前から知っていたことは、男女の間ではあれこれとさまざまな言い方があるが、男女双方で言い方が混乱してはいけないので、女性を「つま」というよりもむしろ男性を「つま」というべきだろう、という答えだった。

e　これをどう理解すればよいのかいっしょに考えたいのだが、私がただずっと前から知っていたことは、男女の間を取り持つ場合に、男女どちらについても「つま」というのが好都合だったということで、女性のみを「つま」というのはどういう理由か見当がつかない、という答えだった。

問三　最初の質問に対する答えの中で、伊勢物語の「武蔵野は今日はな焼きそわかくさのつまもこもれりわれもこもれり」という和歌は、どのように説明されているか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　男が女のことをよんだ歌であって、自分が武蔵野に隠れていたところ、その野を焼いてしまうということになって、「つ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ま」である女もわたしも二人ともこもっているから、焼かないでくれと訴えた歌である、と説明されている。

b　男が女のことをよんだ歌であって、「つま」である女が武蔵野に隠れていたところ、その野を焼いてしまうということになって、それならいっしょにこもって、ともに焼かれてしまいましょうとよんだ歌である、と説明されている。

c　武蔵野にこもっている男女が焼かれそうになったとき、互いの身の上を気づかって、双方から「つま」と呼びあいながら、どうか焼かないでくださいと懇願している歌である、と説明されている。

d　女が男のことをよんだ歌であって、男が武蔵野に隠れていたところ、その野を焼いてしまうということになって、「つま」である男もわたしも二人ともこもっているから、焼かないでくれと訴えた歌である、と説明されている。

e　女が男のことをよんだ歌であって、武蔵野に隠れている男のことを気づかって、その野を焼くというのなら、「つま」であるわたしがこもって身代わりになりたいと願った歌である、と説明されている。

問四　二度目の質問において、「武蔵野は今日はな焼きそわかくさのつまもこもれりわれもこもれり」という和歌のどのような点が問題にされているか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　男性が人のむすめを盗んで武蔵野まで連れて来たところ、盗人として捕えられた。その際、女性を草むらに置いて去って行ったということになると、盗人とがめられたのは女性ではなく男性のほうなので、女性のよんだ歌とするのは間違っているという点が問題にされている。

b　男性が人のむすめを盗んで武蔵野まで連れて来たところ、盗人として捕えられた。その際、女性を草むらに置いて去って行ったとあるのだから、捕えられたのは男性ではなく、女性のほうで、そこで男性と女性の取り違えが生じているという点が問題にされている。

c　男性が人のむすめを盗んで武蔵野まで連れて来たところ、盗人として捕えられたとされるが、和歌では「つまもこもれりわれもこもれり」とあるので、実際に捕えられたのは男性と女性の二人だったということになって、説明と食い違うという点が問題にされている。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ｄ　男性が人のむすめを盗んで武蔵野まで連れて来たところ、盗人として捕えられたとされるが、じつは二人とも草むらに隠れて無事に逃げられたのであり、それを、なぜ男性の歌として「つまもこもれりわれもこもれり」とよんだのかという点が問題にされている。

ｅ　男性が人のむすめを盗んで武蔵野まで連れて来たところ、盗人として捕えられた。その際、女性を草むらに置いて去って行ったとあるのだから、その野が焼かれかけたときに女性がよんだのならば、「つまもこもれりわれもこもれり」とはいえないはずだという点が問題にされている。

問五　「わかくさの」という語について、どのような主張が述べられているか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

ａ　「わかくさの」という語は、「あしひきのやま」などと同様に、一般的には「わかくさのつま」と「つま」にかかる枕詞ではあるが、必ずしも妻のことをよむとは限らず、女性から男性に呼びかける歌に用いてもさしつかえない。

ｂ　「わかくさの」という語は、「あしひきのやま」などと同様に、「わかくさのつま」と「つま」にかかる枕詞であり、女性のよむ和歌の言葉として最適であるが、男性から女性を「わかくさの」と呼びかけるのはおかしい。

ｃ　「わかくさの」という語は、「あしひきのやま」などと同様に、「わかくさのつま」と「つま」にかかる枕詞であり、男性が妻のことをよむのに用いるのであって、女性が男性のことを「わかくさの」と歌うことは道理に合わない。

ｄ　「わかくさの」という語は、「あしひきのやま」などと同様に、「わかくさのつま」と「つま」にかかる枕詞であるので、これを実際の「若草」として用いるのはおかしい。

ｅ　「わかくさの」という語は、「あしひきのやま」などと同様に、「わかくさのつま」と「つま」にかかる枕詞であり、妻のことをよむものであるが、女性が男性のことを唐突に「若い」とよむのはかなりあやしい。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問六　「つま」という語の表記について、どのように説明されているか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　万葉集ではさまざまな表記があって一定しないが、それでも「妻」という文字があれば「つま」とよむことは明白であり、ときには親しい間柄を「つま」ということがあっても、「朝妻」や「吾妻」というように明確に「妻」の文字を入れて表記するほうがよい。

b　万葉集ではさまざまな表記があって一定しないが、それでも「妻」という文字があれば「つま」とよむことは明白であり、親しい間柄であっても「夫」や「父母」などと書いて「つま」とよまれることはないので、男性から女性に向けて「つま」というのがふつうである。

c　万葉集ではさまざまな表記があって一定せず、「妻」という文字があっても必ずしも「つま」とよむとはかぎらないから、親しい間柄のことを「夫」や「父母」などと書いて「つま」とよまれることがあったとしても、とりたてて不思議なこととはいえない。

d　万葉集ではさまざまな表記があって一定しないが、それでも「妻」という文字があれば「つま」とよむことは明白であり、一方、きわめて限定的であるが、とくに「夫」や「父母」といった親しい間柄の場合には、これを「つま」とよむこともまた、明白である。

e　万葉集では「妻」という文字以外で「つま」とはよむことがないのは、「春」の文字以外で「はる」とよむことが決してないのと同様であって、従って男女双方が親しい仲だというのを「つま」ということにはならず、やはり男性から女性に向けていう場合に限定されることになる。

問七　「たなばたのつままつよひの秋風にわれさへあやな人ぞこひしき」の和歌は、拾遺和歌集では、初句が「ひこぼしの」となっている。初句の違いによって生じる意味について、最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　「たなばたの」という初句の場合、七夕の祭のとき、この日は年にただ一回だけ彦星と織姫が出会える機会であると

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

いう歌になって、男女双方から互いに「つま」ということになるのに対して、初句が「ひこぼしの」だと、男性である彦星が女性の織姫を待つ歌になり、「つま」は一方的に女性をさすことになる。

b　「たなばたの」という初句の場合、「秋風」が「飽きる」の掛け詞の機能をもち、織姫が彦星に飽きられているにもかかわらず、むなしく待っていることになって、「つま」は男性を意味することになるのに対して、初句が「ひこぼしの」だと、男性である彦星が女性の織姫を待つことになって掛け詞にはならない。

c　「たなばたの」という初句の場合、七夕の祭のとき、彦星が織姫のことを恋しく思うように、男性作者である自分も織姫のことが恋しく思われるという歌になるのに対して、初句が「ひこぼしの」だと、男性である彦星が女性の織姫を待つことになり、彦星と同じ男性である自分も女性の「つま」が恋しく思われるという歌になる。

d　「たなばたの」という初句の場合、女性である織姫が「つま」である彦星を恋しく待っていることになり、「つま」は男性を意味することになるのに対して、初句が「ひこぼしの」だと、男性である彦星が女性の織姫を待つことになり、結局「つま」は女性という、まったく逆のことになる。

e　「たなばたの」という初句の場合、七夕の祭の日になってもやってこない彦星のことを、「つま」である織姫がただひたすら待つことになって、「つま」は女性を意味することになるのに対して、初句が「ひこぼしの」だと、「つま」である彦星を織姫がただひたすら待つことになり、「つま」は男性という、まったく逆のことになる。

問八　筆者は「つま」という語の使い方について、どのように考えているのか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　万葉集でも松浦佐夜姫がよんだ和歌で、「つまごひ」と男性を恋い慕うよみ方をしているのも、男性のことを「つま」と指していっている。また「たなばた」の和歌でも、男性にあたる彦星を「つま」とよんでいる。このように考えれば、男性のことを「つま」とよむのが正しく、女性だとするのはむしろ間違いだった、と筆者は考えている。

b　万葉集では松浦佐夜姫のことを「つま」とよみ、「たなばた」の和歌では男性にあたる彦星のことを「つま」とよんでいるところから、奈良時代から平安時代にかけてよみ方が変化していった。つまり、古くは男女ともに「つま」とよ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

んでいたのが、和泉式部の時代になって男性のみを「つま」というようになった、と筆者は考えている。

c　万葉集では松浦佐夜姫のことをよんだ和歌で、「つまごひ」と女性を恋い慕うよみ方をし、また「たなばた」の和歌では男性にあたる彦星が女性のことを「つま」といっている。従って「つま」を男性とするか女性とするか、今のところ結論は出せない、と筆者は考えている。

d　万葉集では松浦佐夜姫がよんだ和歌で、「さよひめつまごひに」と男性のことを「つま」といっているかと思えば、「たなばた」の和歌では「たなばたのつま」と彦星・織姫双方から互いに「つま」とよんでいるとする。このような例から、古くはむしろ男性のことを「つま」といっていたのが、次第にどちらからもいえるようになった、と筆者は考えている。

e　万葉集の松浦佐夜姫の立場にたってよんだ和歌で、「つまごひ」と男性を恋い慕うよみ方をしているのも、男性のことを「つま」といっており、さらに、「たなばた」の和歌では女性である織姫から男性である彦星のことを「つま」とよんでいる。このように考えれば、女性だけでなく、男性のことを「つま」とよんでも差支えない、と筆者は考えている。

問九　傍線部Ⓐを現代語訳せよ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第四講　復習問題

①　次の文章は、主人公の中納言が唐の国へ渡り、その地の后を見かけ、その美しさに感動している場面である。これを読んで、後の問に答えよ。

〈中略〉洞庭といへるところに、御門御幸（みかどみゆき）したまひ、中納言もつかうまつりたまへるを見たてまつらむと、遠き国の人びとさへ残りなくつどひて、かたちありさま見るに、肝消えて思はぬなく、及ぶまじきは病になりぬべく、われはと思ふ人びとぞ「かくておはするほどだにも、見え知られたてまつらばや」と心をかけて思はぬはなかりける。…（以下略）

問　中納言の容姿を見て唐の国の女性たちはどのように思ったのか。最も適当なものを一つ選べ。

a　唐の国の女性たちは、肝がつぶれるほどびっくりして中納言に思いをかけない者はなく、また、中納言の相手として釣り合うほどの容姿をもたない者は病気になってしまいそうで、自分こそはと思っている女性たちだけが、せめて自分がここにいることだけでも、中納言に知ってほしい、と思った。

b　唐の国の女性たちは、肝がつぶれるほどびっくりして中納言に思いをかけない者はなく、また、中納言に対する自分の思いが届かない者は病気になってしまいそうで、自分こそはと思っている女性たちだけが、せめて自分が独身でいる間だけでも、中納言と知り合いになりたい、と思った。

c　唐の国の女性たちは、肝がつぶれるほどびっくりして中納言に思いをかけない者はなく、また、中納言の相手として身

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

分違いの者は病気になってしまいそうで、自分こそはと思っている女性たちだけが、せめて中納言が唐の国にいる間だけでも、自分の存在を相手に知られたい、と思った。

d　唐の国の女性たちは、肝がつぶれるほどびっくりして中納言に思いをかけない者はなく、また、中納言の相手として年齢の釣り合いがとれない者は病気になってしまいそうで、自分こそはと思っている女性たちだけが、せめて中納言がもう少し年をとっていたら、自分とかかわることはなかったのに、と思った。

e　唐の国の女性たちは、肝がつぶれるほどびっくりして中納言に思いをかけない者はなく、また、中納言と遠く離れた地に住んでいる者は病気になってしまいそうで、自分こそはと思っている女性たちだけが、せめて后がいる間にでも、后の力で中納言と知り合いになりたい、と思った。

②「枯れでさはこの花やがてにほはなむふるさと恋ふる人あるまじく」の和歌のおおよその意味として、最も適当なものを一つ選べ。

a　この花はひとたび枯れても、あなたのいうとおり、いつかは美しく照りかがやくに違いありません。日本を恋しがって悲しむ人がないように。

b　この花は枯れることもなく、あなたのいうとおり、いつかはすばらしい香りを放つようになるに違いありません。日本を恋しがって悲しむ人がこの世からなくなるまでは。

c　この花はひとたび枯れても、あなたのいうとおり、いつかはすばらしい香りを放ってほしいものです。日本を恋しがって悲しむ人を引きとどめるために。

d　この花は枯れることもなく、あなたのいうとおり、このまま美しく照りかがやくに違いありません。日本を恋しがって悲しむ人を慰めるために。

e　この花は枯れることもなく、あなたのいうとおり、このまま美しく照りかがやいていてほしいものです。日本を恋しがって悲しむ人がないように。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

③　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

（内侍の乳母）「〈中略〉（一品の宮は）まいて盛り過ぎさせたまひぬ、あな恥づかし、おぼろけの人見えたまふべくやはとて止みにしを、少将命婦の局になん、時々寄りたまふとぞあなりしを、人の言ひなすならん。すべて候（さぶら）ふ人につけてなど、かかることは出で来るなめり。またまねびをだになしたまひそ」と、…（以下略）

問　内侍の乳母は中納言の君に、狭衣の君のことについてどのように話したか。最も適当なものを一つ選べ。

a　「一品の宮は若さの盛りが過ぎていて、言い寄られるのはとても恥ずかしいことであり、狭衣の君には一品の宮のような普通の人では釣り合うはずがない。狭衣の君は、少将命婦の局に時々お立ち寄りになるということだったので、そのことを誰かがいわくありげに言いふらしているのだろうと思われる。何事もお仕えする人の心がけにつけてこのような問題も生じるのだから、二度と狭衣の君のことを口にしてはならない」と話した。

b　「一品の宮は若さの盛りが過ぎていて、言い寄られるのはとても恥ずかしいことであり、狭衣の君には年相応の普通の人がちょうど釣り合うだろう。狭衣の君は、少将命婦の局に時々お立ち寄りになるということだったので、そのことを誰かがいわくありげに言いふらしているのだろうと思われる。何事もお仕えする人の心がけにつけてこのような問題も生じるのだから、また狭衣の君のような問題は起こりうるだろう」と話した。

c　「一品の宮は若さの盛りが過ぎていても立派な方なので、狭衣の君にはそうではない普通の人がちょうど釣り合うだろう。狭衣の君は、少将命婦の局に時々お立ち寄りになるということだったので、そのことを誰かがいわくありげに言いふらしているのだろうと思われる。何事もお仕えする人の心がけにつけてこのような問題も生じるのだから、あなたも狭衣

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

の君のような行動をしてはいけない」と話した。

d「一品の宮は若さの盛りはまだ過ぎておらず、とても立派な方なので、普通の人では釣り合うはずがない。狭衣の君は、少将命婦の局に時々お立ち寄りになるということだったので、そのことを誰かがいわくありげに言いふらしているのだろうと思われる。何事もお仕えする人の心がけにつけてこのような問題も生じるのだから、また狭衣の君のような問題は起こりうるだろう」と話した。

e「一品の宮は若さの盛りが過ぎていて、とても不審なことではあるが、狭衣の君とは一品の宮のような普通の人でも釣り合うのかもしれない。狭衣の君は、少将命婦の局に時々お立ち寄りになるということだったので、そのことを誰かがいわくありげに言いふらしているのだろうと思われる。何事もお仕えする人の心がけにつけてこのような問題も生じるのだから、二度と狭衣の君のことを口にしてはならない」と話した。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第五講　『古今著聞集』／『明恵上人伝記』　同志社大学

一　次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

大殿・小殿とて聞こえある強盗の棟梁ありけり。大殿は、後鳥羽院の御時からめられけり。小殿、高倉の判官章久がもとへ行きていひけるは、「日来年来からめかねて、あなぐり求められ候ふ小殿と申す強盗こそおもふやうありて参りて候へ。はやく受け取らせ給へ」といふ。章久まことしからずおぼえながら、a おろおろ子細を問へば、小殿いはく、「ア 御不審候ふこと、もつともそのいはれ候へども、まづおぼしめし候へ。ただのしら人が強盗とみづから名乗りて、命をまかせまゐらせてなにのせんか候ふべき」といへば、① げにもことわりにて、くはしく問答するに、小殿がいふやう、「年来西国のかたにて海賊をし、東国にては山立（やまだち）をし、京都にては強盗をし、辺土にてはひきはぎをしてすぎきつるなり。かかる重罪の身をうけ候ひぬれば、この世にてもやすき心候はず。夜もやすくもねず、ひるも心うちくつろぐことなし。世のおそろしく、人のつつましきこと、かなしき苦（く）患（げん）にて候ふなり。A さても一期ことなくてあるべき身にても候はず。つひにはさだめてからめいだされて恥をさらし、かなしき目をこそ見候はんずれば、人手にかからんよりは、心と参りて、かつは年来の罪をもむくはんがために、頸をのべて参りて候ふ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

なん」といへば、章久あはれにおぼえて、[b]左右なくも受け取るべけれども、その儀なくして、答へけるは、「いまは使庁の庁務停止したるなり。かつは聞きもおよぶらん。年来つくりおける[B]牢どもみなうちやぶりて仏所につくりなどして、一向庁務をとどめて、後世のことをいとなむなり。徳大寺殿に伺候の源の判官康仲こそ当時ことに高名をたてんとする人なれ。かしこに行きてこの子細をいはば、さだめて悦びおもはんずらん」といへば、「さ候はば、御文をたまはり候ひて、源の判官殿へ参り候はん」といへば、「それはやすきことなり」とて、文書きとらせければ、すなはち持ちて康仲がもとへゆきて、章久がもとにていひつるがごとくにいひて、「もし万が一、命をいけて、めしもつかはれ候はば、別の奉公には、余党その数おほく候ふを、一々にからめさせまゐらせん」といへば、康仲興あることに思ひて、受け取りてつかひけり。

　給物三十石をとらせて朝夕めしつかふに、ことおきてかひがひしく大切のことどもおほかりければ、大納言家にこのやうを内々申し入れたりけるに、「いと興あることにこそ。さやうの者は、中々さるかたもあるなり。我に得させよ。めしつかはん」と仰せられければ、参らせてけり。侍ひゆるされてめしつかひけり。康仲が恩のうへに、五十石の給物をたまはせたりければ、小殿よろこびて、「今はかくて一期身やすくてやみなんずれば、おもふこと候はず。伺候のあひだには、いかにも御所中ならび

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

に御近辺には狼藉のことあらすまじく候」とて、一向に御とのゐして奉公をいたしければ、誠にかひがひしくそのあたりには夜の恐れなかりけり。

（『古今著聞集』）

注
山立　山賊。
使庁　検非違使庁。
徳大寺殿・大納言家　いずれも藤原実基。

問一　傍線部ａ・ｂの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選べ。

ａ　おろおろ
1　じっくりと　2　あたふたと　3　おびえて
4　おおざっぱに　5　ひそかに

ｂ　左右なく
1　決着をつけず　2　躊躇せず　3　区別なく
4　根拠なく　5　本意でなく

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問二　傍線部Ａ・Ｂの解釈として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選べ。

Ａ　さても一期ことなくてあるべき身にても候はず

1　それにしても、盗みを重ねた罪深い私が生涯このまま平穏でいられる境遇でもありません
2　それにしても、盗みを重ねた罪深い私が善行を積まずに生きられる身分でもありません
3　それにしても、私を捕らえられなかったあなたが世間に顔向けできる立場でもありません
4　そうはいっても、盗みを重ねた罪深い私が死後無事に極楽へ行ける運命でもありません
5　そうはいっても、私を捕らえられなかったあなたがこのままの身分でいられるわけもありません

Ｂ　牢どもみなうちやぶりて仏所につくりなどして、一向庁務をとどめて、後世のことをいとなむなり

1　牢獄はすべて壊して、仏堂に作り直すなどし、検非違使としての仕事もいったん中断して、世間の今後の安寧を祈っているのだ
2　牢獄は強盗がすべて壊したので、仏堂のしつらえなどをし、検非違使としての仕事もまったくしないで、殺された人々の極楽往生を祈っているのだ
3　牢獄は強盗がすべて壊したので、仏堂を作るなどし、検非違使としての仕事もすっかり終わらせて、余生を過ごしているのだ
4　牢獄はすべて壊して、仏堂に作り直すなどし、検非違使としての仕事もすっかりやめて、来世の安楽を祈っているのだ
5　牢獄はすべて壊れたので、仏堂に作り直すなどし、検非違使としての仕事もまったくしないで、日々修行しているのだ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問三　傍線部①「げにもことわりにて」の文法的説明として適当なものを、次のうちから一つ選べ。

1　副詞「げに」＋係助詞「も」＋形容動詞「ことわりなり」の連用形＋完了の助動詞「つ」の連用形
2　副詞「げに」＋係助詞「も」＋名詞「ことわり」＋完了の助動詞「ぬ」の連用形＋接続助詞「て」
3　副詞「げに」＋係助詞「も」＋形容動詞「ことわりなり」の連用形＋接続助詞「て」
4　名詞「げ」＋格助詞「に」＋係助詞「も」＋形容動詞「ことわりなり」の連用形＋接続助詞「て」
5　名詞「げ」＋格助詞「に」＋係助詞「も」＋名詞「ことわり」＋格助詞「にて」

問四　傍線部ア「御不審候ふこと、もつとももそのいはれ候へども、まづおぼしめし候へ」の説明として適当なものを、次のうちから一つ選べ。

1　小殿が何をしにきたのか戸惑う章久に対して、小殿は大殿の代わりに自分をつかまえて欲しいと訴えている。
2　小殿が改心したのかを疑う章久に対して、小殿は悪行を悔いて仲間をつれてくるので信じて下さいと訴えている。
3　小殿を強盗と疑う章久に対して、小殿は清廉潔白ですと嘘をついて疑いを解こうとしている。
4　小殿が大殿を脱獄させるつもりかと疑う章久に対して、小殿はそのつもりはありませんと言って疑いを解こうとしている。
5　小殿の正体を疑う章久に対して、小殿はいつわって自首しても何の得もありませんと言って疑いを解こうとしている。

問五　本文の内容に合致するものを、次のうちから二つ選べ。

1　小殿は東西や中央・地方をまたにかけて悪行を重ねていた。
2　康仲は徳の高い人として有名だった。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

3　章久は、康仲にあてて小殿の罪を許すよう嘆願状を書いた。
4　小殿は章久に、もし生かしてくれれば手柄をたてさせようと約束した。
5　大納言家は康仲の給物三十石にさらに二十石を加えて、小殿に五十石を与えた。
6　大納言家に仕えることになった小殿はよろこんだ。

問六　大納言家は小殿をどのように評価したのか、説明せよ（句読点とも三十字以内）。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

二　次の文章は、明恵上人の伝記の一部であり、現在の京都市にある高雄山神護寺で九歳で出家した後のことを記している。これを読んで、後の設問に答えよ。

十二歳の時、思ふやう、真正の知識を求めて、正路（しやうろ）を聞かずんば、徒らに心の隙（ひま）のみ費して、得道の益あるべからず。大なる損なるべし。いはんやまた[A]<u>生死速やかなり。後を期（ご）すべきにあらず</u>。急ぎ正（しやう）知識を求めて、なほ山深き幽閑に閉ぢ籠りて修行せんと思ひて、[a]<u>すでに</u>高雄山を出でんと思ひぬ。よりて薬師堂に詣でて暇（いとま）を申し、また鎮守八幡大菩薩にも暇を申して、暁、罷り出でんと寝たる夜の夢に、すでに高雄を出でて、三日坂（みかさか）まで下りたれば、路に大蛇、頭を捧げて横たはり向かふ。また、八幡大菩薩の御使とて、大きなる蜂の四、五寸ばかりなる、飛び来りて言はく、「なんぢ、この山を去るべからず。もし[b]<u>おして</u>去らば、前（さき）に難に遇ふべし。<u>未だその時節到来せざるが故に、道行（だうぎやう）また成ずべからず</u>」と言ふと思ひて、夢覚めぬ。さては子細こそあらめと思ひしかば、このたびは思ひ止まりぬ。

十三歳の時、心に思はく、今ははや十三になりぬ。すでに年老いたり。死なんこと近づきぬらん。老少不定の習ひに、今まで生きたるこそ不思議なれ。古人も学道は火を鑽（き）るがごとくなれとこそ言ふに、悠々として過ぐべきにあらずと、自ら鞭を打ちて、昼夜不退に道行を励ます。ある時は後ろの山の、木の空（うつほ）に木の葉深く積もれる上に常に行きて座し、ある時は見解（けんげ）おこる

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

やう、かかる五蘊（ごうん）の身のあればこそ、若干（そこばく）の煩ひ苦しみもあれ。B帰寂したらんにはしかずと思ひて、いかなる狗狼（くらう）・野干（やかん）にも食はれんと思ひ、三昧原（さんまいはら）へ行きて臥したるに、夜更けて犬ども多く来りて、傍（そば）なる死人なんどを食ふ音してからめけども、我をばよくよく嗅ぎて見て、食ひもせずして、犬ども帰りぬ。恐ろしさは限りなし。このやうを見るに、さてはいかに身を捨てんと思ふとも、定業（ぢやうごふ）ならずは死すまじきことにてありけりと知りて、その後は思ひ止まりぬ。「おとなしくなりて後、このことを思ふに、その時の見解にて死にたらましかば、あさましきことにてありなまし。はかなかりけることかな」とて、自ら笑ひたまひけり。

（『明恵上人伝記』）

注

真正の知識・正知識　ものごとを正しく分別する方法。

正路　人として守るべき道理。

得道の益　仏教の修得に役立つこと。

薬師堂・八幡大菩薩　神護寺は、本尊の薬師如来を薬師堂に安置し、境内に守護神として八幡大菩薩を祀っていた。

火を鑽る　棒や石を擦り合わせて火をおこすこと。敏捷に作業を進める必要がある。

見解　洞察。

五蘊　人間を形成しているという、肉体・感覚など五つの要素。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

狗狼・野干　犬、狼、狐など。
三昧原　墓地。
からめけども　からからと鳴り響くが。
定業　前世の善・悪の行いの結果として現世の楽・苦が定まっていること。

問一　傍線部ａ・ｂの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選べ。

ａ　すでに

1　すぐにも　2　すべて　3　とっくに
4　まぎれもなく　5　すんでのところで

ｂ　おして

1　静かに　2　気ままに　3　一緒に
4　即座に　5　無理に

問二　傍線部Ａ・Ｂの解釈として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選べ。

Ａ　生死速やかなり。後を期すべきにあらず。

1　死はすぐにやってくる。しかも、死んだ後の世で何かができるわけではない。
2　死はすぐにやってくる。だから、万事すべきことを後まわしにしてはならない。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

3　生まれてから死ぬまでの年月は、一瞬である。しかし、すべきことを後代の人に託してはならない。
4　生まれてから死ぬまでの年月は、止まらずに過ぎてゆく。そして、後に繰り返されることはない。
5　生きるか死ぬかは、早いうちに決めなければならない。すなわち、後で考えることができるものではない。

B　帰寂したらんにはしかず

1　命を捨てたであろうと推測して、それには間違いがない
2　命を捨てようと決心して、それに迷いがない
3　命を捨てようと決心して、それが周囲に知られることはない
4　命を捨てるならば、それに優ることはない
5　命を捨てるならば、それほど愚かなことはない

問三　二重傍線部「未だその時節到来せざるが故に、道行また成ずべからず」の説明として適当なものを、次のうちから一つ選べ。

1　薬師如来の使が三日坂に到着するまでには、まだ時間がかかる。八幡大菩薩と薬師如来と両者の見送りを受けないのでは、仏道修行への出発もしてはならない、と注意している。
2　蜂が冬ごもりをする季節には、まだなっていない。道をさえぎるものがいなくなる冬まで出発を待てないのでは、仏道修行も完成させることができない、と教えている。
3　高雄山での修行を終えて次の段階に進む時機には、まだ至っていない。今、高雄山を出てしまったのでは、仏道修行を完成させることができない、と戒めている。
4　仏道修行の完成に必要な困難に出遭うには、まだ出発を待つほうがよい。困難を乗り越える経験を重ねないのでは、

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

仏道修行を完成させることができない、と諭している。
5　仏道修行をさらに進める夢を見るには、まだ冥想の時間が足りない。冥想しつつ仏道修行の完成を夢見られないようでは、現実の仏道修行も始めてはならない、と警告している。

問四　本文の内容に合致するものを、次のうちから二つ選べ。

1　上人は、十二歳で高雄山を出ようとしたとき、薬師如来や八幡大菩薩に挨拶をしているうちに、朝を迎えてしまった。
2　上人は、三日坂まで、大蛇に案内されて下ってきた。
3　上人は、八幡大菩薩の意向を、夢の中で、蜂から説明された。
4　上人は、十三歳のとき、老いは感じたが、かえって不死の境地に近づいたと思った。
5　上人は、昼夜分かたずの修行を、自らを奮い立たせながら続けた。
6　上人は、仏道修行は、年老いたら、閑静なところで進めるのがよいと考えている。

問五　傍線部について、上人はどのような行為を「はかなかりけることかな」と言ったのか、説明せよ（句読点とも三十字以内）。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第五講　復習問題

① 次の傍線部ａ・ｂの意味として適当なものを、後の中からそれぞれ一つ選べ。

「〜笠をさして送るは、あはれにａありがたき者の心なり」と…
〜智（さとり）あるｂやむごとなき僧、…

ａ　ありがたき
イ　正直な　ロ　奇特な　ハ　有能な　ニ　親切な　ホ　風流な

ｂ　やむごとなき
イ　ひときわ尊い　ロ　たいそう忙しい　ハ　とりわけ有名な
ニ　はなはだ裕福な　ホ　きわめて美しい

② 「たしかに西の京の家に送りつけてぞ、内に返りまゐりたりける。」の解釈として適当なものを、次の中から一つ選べ。

イ　忠兼は、得任を西の京にある得任の家まできちんと送り届けてから、自宅に帰った。
ロ　忠兼は、得任を西の京にある得任の家まで送り届けたことを、きちんと天皇に報告した。
ハ　忠兼は、得任を西の京にある得任の家まできちんと送り届けてから、宮中に引きかえした。
ニ　得任は、忠兼に西の京にある得任の家まできちんと送ってもらったことを、心の中で感謝した。
ホ　得任は、忠兼に西の京にある得任の家まで送ってもらったので、きちんと時間内に戻って来られた。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

③「これはいかにせしめたまふぞ」の波線部の文法的説明として適当なものを、次の中から一つ選べ。

イ　動詞「せしむ」の連用形＋尊敬の補助動詞「たまふ」の連体形
ロ　サ変動詞「す」の連用形＋尊敬の助動詞「しむ」の連用形＋尊敬の補助動詞「たまふ」の連体形
ハ　サ変動詞「す」の連用形＋使役の助動詞「しむ」の連用形＋謙譲の補助動詞「たまふ」の終止形
ニ　サ変動詞「す」の未然形＋尊敬の助動詞「しむ」の連用形＋尊敬の補助動詞「たまふ」の連体形
ホ　サ変動詞「す」の未然形＋使役の助動詞「しむ」の連用形＋謙譲の補助動詞「たまふ」の終止形

④「いさ、あなたの方便品は［　］、心経はまことに言へり。～」の空欄に入る語句として適当なものを、次の中から一つ選べ。

イ　知りぬ　　ロ　知らず　　ハ　知らめ　　ニ　知らむ　　ホ　知りね

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第六講『松帆浦物語』　関西学院大学

次の文章は、『松帆浦物語』の語り出しの部分である。これを読んで、後の問に答えなさい。

遠からぬ世の事にや侍りけむ。四条わたりに、中納言にて右衛門の①かみかけたる人なむおはしましける。中将殿とて御子一人ありて、②さうざうしく思しけるに、③ありありて稚児（ちご）出でき給ひにける。生ひ先見えてかたちいと美しく物し給ひければ、限りなくかしづき給ふほどに、父の卿ははかなくなり給ひぬ。④たづきなきやうにておはしましけるに、⑤中将の君らうたき物にして、十ばかりまでぞありける。そのうち*横川（よかは）に禅師の房とて、このをぢになむおはしける。中将に申し給ふ。「この若君、いたづらに生ひ出で給はむよりは、山にのぼせて物習はし給へかし」など⑥よりよりすすめ⑦申されしかば、横川へぞのぼせられける。大方の学問にも和歌の道にも心を入れて、筆とる事も⑧たどたどしからず、はかなきすさみごともつきづきしく、心ざま人に優れたりしかば、一山のもてあそび、稚児童（わらは）もむつましき事に思ひし程に、三年ばかりこの山に送りけるになむ。かかればこの母君久しく見ぬは悲しとて、折々里へ呼ばせけるに、ある時禅師申されけるは、「学問の方もさとく賢き人なり。法師になして父の御跡をも⑨とはせ給へかし」などねんごろに語らひ申し給へば、「⑩あたらかたちを⑪墨の袖にやつさむも情けなく、

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

⑫八重たつ雲にまじりなむも心苦し」などのたまひて、うちとけたる答へもし給はねば力なし。かくて後はあやふくや思はれけむ、京に住ませむ事を中将にも申し給ふに、つれづれの慰めにもとや思はれけむ、同じ心にのたまへば、禅師もいかがせむとて、泣く泣く京へぞ送りける。この稚児も横川に住みつき給ひければ、寂しかりし山水にも名残多く、遊び伴ひし稚児童にも離るることなむ悲しかりける。みな京近きわたりまで送り来てぞ名残惜しみける。さて禅師立ち帰りて、年月手習などして住み給ひし所を引き開けて見給へば、いと美しき手して障子に書き付けらる、

⑬九重（ここのへ）に立ち帰るとも年を経てなれし⑭深山の⑮月は忘れじ

これを見て、禅師の君よりはじめて、皆泣きにけり。かくて後は元服して藤侍従とぞ申しける。*あげおとりもせず、いよいよ目驚くばかりのかたちにて物し給ひける。十四になり給ひし⑯春の頃かとよ、もと立ちなれし横川の法師、また京にも優なるをのこあまた来あひて、「北山の桜いまなむ盛りなるよし人申すなり。侍従の君見給へかし。伴ひ奉らむ」と口々言へば、深山がくれの色香も殊にゆかしき心地して、俄（にはか）に思ひ立ちぬ。道の程も人目⑰つつましければ、わざとやつしてぞおはしける。若きどち⑱駒なめてみちすがら眺め渡せば、遠き山の端そこはかとなく霞みつつ、野辺のけしき青み渡り、芝生の中に名も知らぬ花

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ども、すみれに交り色々咲きて、雲ゐの雲雀姿も見えず囀（さへづ）りあひたるさまども、いはむ方なし。心ざす山はやや深く入る所にて、水の流れ岩のたたずまひも、写し絵を見るやうになむ覚えける。うち吹く風にそことなく匂ひ来るに、人々心あくがれて急ぎのぼりつつ見れば、数知らぬ花ども枝もたわむまで開きつつ、⑲今日こずはと見えたり。山がくれともいはず、都のかたの人と見えてあまた集ひ来て、木（こ）の本、岩がくれの苔にむれゐつつ、歌よみ酒のみて遊びなどさまざまにぞ見えし。侍従の君は花に眺め入りてゐ給へるに、花よりもこの君に目とどめたる人あまたありて、⑳従ひ歩（あり）くも物むつかしく覚えければ、㉑花にはうとからで、引き入りたる所もがなと、願ひ求めつつ行くに、本堂のかたはらに、*院家（ゐんげ）にやあらむ、檜皮（ひはだ）の軒朽ち忍草所得顔（ところえがほ）にて、破（や）れたる御簾かけたるあり。このつれたる人の中に知るたよりありて、ここにしばしのやどりを構へたり。短冊とり出しうち吟じなどしけり。京より持たせたる、*檜破子（ひわりご）、*ささえやうのもの、㉒旅のまかなひはかなくしつつ遊ぶ。

（注）

＊横川（よかは）…比叡山延暦寺の三塔の一つ。

＊あげおとりもせず…元服して髪をあげても、前より姿が悪くなることもなく。

＊院家（ゐんげ）…寺内に設けられた本寺に付属する寺院。

＊檜破子（ひわりご）…食べ物を入れて持ち運ぶ容器。ヒノキの薄板で作られている。

＊ささえ…酒などを入れた携帯用の竹筒。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問一　傍線部①「かみかけたる人」の解釈として最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　髪を剃って僧侶となっている人
ロ　髪を肩に掛けている人
ハ　長官を兼任している人
ニ　神仏に祈願している人
ホ　上座にいる人

問二　傍線部②③④⑥の意味として最も適当なものを次のイ〜ホからそれぞれ一つずつ選べ。

②「さうざうしく」
イ　落ち着かなく　ロ　やかましく　ハ　頼もしく
ニ　嬉しく　ホ　寂しく

③「ありありて」
イ　あってはならないことに　ロ　ようやくのことで
ハ　ありがたいことに　ニ　あるがままに
ホ　たちまち

④「たづきなき」
イ　頼りとするものがない　ロ　慰める手立てがない
ハ　助ける手立てがない　ニ　尋ねる方法がない

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ホ　手を取り合う暇がない

⑥「よりより」

イ　こともあろうに　　ロ　選りすぐって　　ハ　拠り所として

ニ　時どき　　ホ　特別に

問三　傍線部⑤「中将の君らうたき物にして」の現代語訳として最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　中将の君は病弱な身でありながらも

ロ　中将の君が自分の子供を可愛がって

ハ　中将の君が弟君を可愛がって

ニ　中将の君をお世話したいと思って

ホ　父の卿は中将の君を可愛がって

問四　傍線部⑦「申され」の説明として最も適当なものを次のイ〜へから一つ選べ。

イ　補助動詞「申す」の未然形＋助動詞（尊敬）「る」の連用形

ロ　補助動詞「申す」の未然形＋助動詞（受身）「る」の連用形

ハ　四段動詞「申す」の未然形＋助動詞（自発）「る」の連用形

ニ　四段動詞「申す」の未然形＋助動詞（可能）「る」の連用形

ホ　下二段動詞「申さる」の連用形

へ　下二段補助動詞「申さる」の連用形

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問五　傍線部⑧「たどたどしからず」の解釈として最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　仮名も漢字も十分に習得していて
ロ　なめらかで勢いがよく
ハ　判読できないような文字もなく
ニ　能筆とは言えないが、のびのびしていて
ホ　未熟とは言えないくらいしっかりしていて

問六　傍線部⑨「とはせ給へかし」の現代語訳として最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　弔いなさいよ　　ロ　弔わせなさいよ　　ハ　継がせなさいよ
ニ　訪ね歩きなさいよ　　ホ　訪問させなさいよ

問七　傍線部⑩⑪の意味として最も適当なものを次のイ〜ホからそれぞれ一つずつ選べ。

⑩「あたら」
イ　せっかくの　　ロ　真新しい　　ハ　可愛らしい
ニ　現在の　　ホ　醜い

⑪「墨の袖」
イ　墨で汚れた衣服　　ロ　薄墨桜色の衣服　　ハ　涙に濡れた衣服
ニ　僧がまとう衣服　　ホ　朱墨で染めた衣服

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問八　傍線部⑫「八重たつ雲」の意味として最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　幾重にも垣根をめぐらした中納言の家
ロ　遠くから思いを馳せる妨げとなる場所
ハ　雲が幾重にも重なってわき立つ山奥
ニ　大勢の僧侶たちのいる所
ホ　いつも雲に覆われているはるか遠い所

問九　傍線部⑬「九重（ここのへ）」、⑭「深山」、⑮「月」は、それぞれ何を表しているか。最も適当なものを次のイ〜チからそれぞれ一つずつ選べ（同じ符号を何回用いてもよい）。

イ　中将　　ロ　稚児　　ハ　禅師　　ニ　横川
ホ　若君　　ヘ　学問　　ト　母君　　チ　御跡

⑬＝　　⑭＝　　⑮＝

問十　傍線部⑯「春の頃かとよ」の現代語訳として最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　春の頃ではなかったようだが　　ロ　春の頃だったろうか
ハ　春の頃であったかもしれない　　ニ　まさしく春の頃だったなあ
ホ　まさしく春の頃に違いない

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問十一　傍線部⑰⑱㉒の意味として最も適当なものを次のイ～ホからそれぞれ一つずつ選べ。

⑰「つつましければ」

イ　慎み深くみせるために　ロ　気恥ずかしいので　ハ　包み隠すために
ニ　うるさいので　ホ　用心して

⑱「駒なめて」

イ　馬を交互にして　ロ　馬を背にして　ハ　馬を並べて
ニ　馬から下りて　ホ　馬の背から

㉒「旅のまかなひ」

イ　旅の愁い　ロ　旅の情け　ハ　旅の道具　ニ　旅の食事　ホ　旅の衣服

問十二　傍線部⑲「今日こずは」の解釈として最も適当なものを次のイ～ホから一つ選べ。

イ　今日咲いている花はなんと見事なことか
ロ　今日来なかったら散ってしまったに違いない
ハ　今日来なかったら二度と来る機会がなかったに違いない
ニ　今日来なかったら都人に会えなかったに違いない
ホ　今日来なかったら人目を避ける必要はなかったのに

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問十三　傍線部⑳「従ひ歩くも物むつかしく覚えければ」の現代語訳として最も適当なものを次のイ～ホから一つ選べ。

イ　後について歩くのも何となく不愉快に思われるので
ロ　侍従も何となく嫌がっているので
ハ　後を慕って来る者がいるのも何となく煩わしく感じられるので
ニ　後をつけるようで何となく気が引けるので
ホ　後を慕って歩いて行くのも難しいと思われるので

問十四　傍線部㉑「花にはうとからで、引き入りたる所」の解釈として最も適当なものを次のイ～ホから一つ選べ。

イ　人には邪魔されず、花を眺めるには都合のよい、奥まった所
ロ　歩くには遠くなく、花を眺めるにも近い、奥まった所
ハ　宴会をするには適当な所で、花を眺めるにも都合のよい、奥まった所
ニ　侍従の君にも相応しく、花を眺めるにも都合のよい、奥まった所
ホ　横川の法師や京の優雅な男たちも花見を満喫するのに都合のよい、奥まった所

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第六講　復習問題

①　次の傍線部ａ・ｂの語句の意味として最も適当なものを、後の中からそれぞれ一つずつ選べ。

明けぬれば、aいつしかと起きて、人々、…
あまりなるまでbかしづかせ給ひし御ことは、…

ａ　いつしかと
イ　いつになったら　　ロ　そのうちに　　ハ　不用意に
ニ　不覚にも　　ホ　早々と

ｂ　かしづか（かしづく）
イ　恩恵を施す　　ロ　お仕えする　　ハ　仕事をする
ニ　大事にする　　ホ　養育する

②　「かくて九月になりぬ。九日、御節供参らせなどして、…」の傍線部の式日は何と呼ばれているか。最も適当なものを次の中から一つ選べ。

イ　七夕　　ロ　端午　　ハ　重陽　　ニ　桃　　ホ　萩

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

③「女院へ、なほ参らせて候はＡせんと定めて、…」の傍線部Ａ「せ」と文法上の分類や用法が最も近いものを次の中から一つ選べ。

イ　世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし　（『古今和歌集』）

ロ「我に恥見すること。いかでこれが報いせん」と思ひなりて、　（『うつほ物語』）

ハ　白河院おりゐさせ給ひてのち、金葉集かさねて俊頼朝臣に仰せて撰ばせ給ふにこそ、初め奏したりけるに、　（『増鏡』）

ニ　宮はいとやすらかに、いま少し大人びさせ給へる御けしきの、紅の御衣にひかりあはせ給へる、たぐひはいかでかと見えさせ給ふ。　（『枕草子』）

ホ「いたく暮れ侍りぬ」と申せば、ながめさして立ち給ふに、雁鳴きて渡る。　（『源氏物語』）

④「たまきはる」という語は、「ひさかたの」や「ぬばたまの」と同じく、和歌において特定の語の前に置かれる修辞の言葉である。このような言葉を何と呼ぶか、最も適当なものを次の中から一つ選べ。

イ　歌枕　　ロ　縁語　　ハ　掛詞　　ニ　序詞　　ホ　枕詞

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第七講『ひとりね』／『折たく柴の記』　近畿大学

一　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

若き男の※物ずきするはよし。人の前にて、我こそ功者らしく覚えたるふりして目利きだてする、いとあさまし。①目利きは、いかにも一目にて見れども、知らぬふりをしているよし。これは何事によらず、物ごとしらぬふりよし。知りだてする事あしき事なり。（略）

人のひく三味線、人のひく琴も、人のひく胡弓なども、②心にはよしあしはよくなうても、少しばかりも手まへやりぬれば知るるものなれど、口に出してそしるべからず。いかほどよく芸能ありても、人の芸に非難をいふこと※芸者心にて、よき人のこころにあらず。※職がたきにていやしき事なり。余が書きし『青楼式』に、「③大臣はいかにも無芸なるがよき」といふ事も、このこころなり。

すべて芸のあるは、※太鼓のやうにてあしきなりとはいひつつも、諸芸ともに人にほめられんと思ふ心ある故に精を出して習ふ。精を出して習ふ故によくなる。よくなる故に、人のがわるく見ゆる。④わるく見ゆるからは、人がこなしたうなるも、法華

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

坊主が目に※善導大師が憎う見え、浄土坊主が目には日蓮のあたまが頭痛にさはりて嫌なも、ただ身が立てたさの事なり。⑤身が立てたいといふ事、わるい事かと思へば、その心がなければ一日もこの世は立たぬものなり。

老子経に、「大道すたれて仁義あり」と言ふたごとく、※仁義・五常のといふものがすつきり無うなつてから、自然と仁義・五常が人々にあるなり。荘子が、「聖人生じて大盗の道がおこる」と言ひしごとく、聖人の生まれ⑥させられて、金といひ銀といひ、礼といひ智といひ、⑦かうすればよいああすればわるいと教へ給ふにより、戸をたてて※鎖鑰（さやく）をかけるといふ事はなぜに、鎖鑰といふ物するわけはどうした事ぞといふて、※根をおして聞いた時は、盗人にとられうかといふ事を用心する、用心する心からはや手前も、人のものをただ取る事はかふしたものぢやといふ事を知りきつたもの故に、⑧聖人出でて盗人の道がさかんに世にはやるといふ。

芸もそのごとし。すべて、紙細工をするには糊（のり）といふものを以て仕立つれども、その糊気が少しありても、虫が付いたりこはばつたりなどするがごとし。魚を塩につけて置くに、その塩気をぬきて喫（くは）ねばならぬがごとしといふも、『庖志』に見へたり。右のごとく芸に精を入れねばならぬに、⑨精を入れおはりてその芸よくなりたらば、すつきりと我慢の気をぬくべし。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

（柳沢淇園『ひとりね』による。ただし本文の一部を省略した↑注：入試問題そのままです）

※物ずき……骨董や芸能に趣味があること
※芸者心……芸人根性
※職がたき……同業者どうしが互いを敵視すること
※太鼓……太鼓持（酒宴の席で客の機嫌を取り、場を盛り上げるのを仕事とする男性）
※善導大師……唐の善導和尚。中国浄土教の大成者
※仁義・五常……儒教で重んじられた教え。いずれも、人が行うべき正しい行動や態度をさす
※鎖鑰……錠前と鍵
※根をおして……ものごとの根本にまで立ち入って

問一　傍線部①の現代語訳として、最も適切なものを次の中から選べ。

1　目利きは、ものの価値を一目で見抜くけれども、分からないふりをしているのがよい
2　目利きは、ものにどんな価値があるか一目で見抜くが、気付かぬふりをしているものだ
3　目利きは、どんな物でも一目見ようとするが、見ても知らんぷりをしている方がよい
4　目利きは、いかにも一目で価値が分かるように見えるが、分かるふりをしているだけだ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問二　傍線部②の意味として、最も適切なものを次の中から選べ。

1　たとえ内心上手だとは思えなくても、少しでも同じことを自分がやればその難しさは分かるのだから、口に出して悪く言うべきではない
2　たとえ内心上手だとは思えなくても、少しでもわが身にひきつけて考えてみれば分かることなのだから、人や芸の悪口を言うものではない
3　少しでもその人の手真似をやれば芸の内容は分かるものだが、たとえ内心上手だとは思えなくても、芸そのものをけなしてはならない
4　少しでも自分に経験があれば人の芸の良し悪しは分かるものだが、たとえ内心上手だとは思えなくても、口に出して悪く言うべきではない

問三　傍線部③の意味として、最も適切なものを次の中から選べ。

1　身分のある者は、どう見ても芸のない性格の人間であるのがよい
2　身分のある者は、どうあれ芸については知らぬふりをするのがよい
3　身分のある者は、どのようにしてでも無芸の思想を貫くのがよい
4　身分のある者は、どう言われようと芸の素養など持たぬ方がよい

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問四　傍線部④の現代語訳として、最も適切なものを次の中から選べ。

1　（人の芸が）悪く見えるので、人を軽んじた態度をとりたくなる
2　（人の芸が）悪く見えるけれども、自分はがんばろうと努力する
3　（人の芸が）悪く見えるのに、人と同じことをやってみたくなる
4　（人の芸が）悪く見えるのは、芸をこなしているだけだからである

問五　傍線部⑤の説明として、最も適切なものを次の中から選べ。

1　自分の芸を世間に認めてほしいという気持ちのためについ人を批判してしまうものだが、そうした批判精神が人々になければ一日たりとも社会は動かぬものだ
2　自分の芸を世間に認めてほしいという気持ちは芸を志す者なら誰しも持つものだが、それがあるために他人の悪口を言ったりいがみあったりする厄介な代物だ
3　自分の芸を世間に認めてほしいという気持ちゆえに他人の芸を悪く言ってしまうものだが、認められたいという気持ち自体は人間にとって必要不可欠なものだ
4　自分の芸を世間に認めてほしいという気持ちは芸人特有のように思えるが、実は日蓮宗の僧と浄土宗の僧とが反目しあう原因にもなっている普遍的なものだ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問六　傍線部⑥と同じ用法の「させ」として、最も適切なものを次の中から選べ。

1　西のかたにさせりける枝のもみぢはじめたりけるを
2　この花の散るを惜しうおぼえさせ給ふか
3　月の都の人まうで来ば、捕らへさせむ
4　御消息を申させはべらむ

問七　傍線部⑦は誰が言っているのか。最も適切なものを次の中から選べ。

1　老子　　2　人々　　3　荘子　　4　聖人

問八　傍線部⑧の理由として、最も適切なものを次の中から選べ。

1　戸締まりの重要性や方法を詳しく教わることで、同時に人の物を盗むという行為があることにも気付いてしまうから
2　戸締まりの方法と盗人の手口について聞いているうちに、泥棒が悪いことだとは思えなくなってきてしまうから
3　聖人が言葉を尽くして正義を説いたとしても、必ずそれに反発して悪事を働く人間が現れるのが世の常だから
4　聖人が善悪を説く際に盗人の例をあまりに持ち出すので、そこまで言うなら自分もやってみようという気になるから

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問九　傍線部⑨の現代語訳として、最も適切なものを次の中から選べ。

1　精進を重ねてその芸が上達したので、これまで芸の上達にこだわってきた気持ちをすっきりさせるべきである
2　精進を重ねてその芸が上達したので、すっきりと気持ちを切り替えて少しはわがままに振る舞うことができる
3　精進を重ねてその芸が上達したら、あとは我慢せずにすっきりとした大らかな心持ちを取り戻すことができる
4　精進を重ねてその芸が上達したら、自分のこれまでの努力に執着する心をすっきりと捨て去るべきである

問十　本文についての説明として、最も適切なものを次の中から選べ。

1　芸を志す者の悪癖を、さまざまな具体例を挙げて皮肉たっぷりに描いている
2　芸を志す者の心得を、多岐にわたるたとえ話を挿入しつつ平易に説いている
3　芸を志す者への指針を、経典の引用や宗教者の話を交えて格調高く示している
4　芸を志す者への注意を、通俗的な話を織り交ぜながら面白おかしく述べている

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

むかし人は、ア いふべき事あればうちいひて、その余はみだりにものいはず、いふべき事をも、いかにもことば多からで、其(その)［1］たりけり。我父母にてありし人々もかくぞおはしける。父にておはせし①人のその年七十五になり給ひし時に、※傷寒をうれへて、事きれ給ひなんとするに、医の来りて※独参湯(どくじんたう)をなむすゝむべしといふ也。よのつねに人にいましめ給ひしは、「年わかき人はいかにもありなむ。イ よはひかたぶきし身の、いのちの限りある事をもしらで、薬のためにいきぐるしきさまして終りぬるはわろし。あひかまへて心せよ」とのたまひしかば、「此(この)事いかにやあらむ」とa いふ人ありしかど、疾喘(しつぜん)の急なるが、見まゐらするもこゝろぐるしといふほどに、※生薑汁(しやうがじる)にあはせてb すゝめしに、それよりいき出で給ひて、つひに其病癒(い)え給ひたりけり。後に母にてありし人の、「いかに、此程は人にそむきふし給ふのみにて、また物のたまふ事もなかりし」ととひ申されしに、「されば、頭のいたむ事殊(こと)に甚(はなはだ)しく、ウ 我いまだ人にくるしげなる色みえし事もなかりしに、日比(ひごろ)にc かはれる事もありA なむには、②しかるべからず。又エ 世の人熱にをかされて、ことばのあやまち多かるを見るにも、③しかじ、いふ事なからむにはと思ひしかば、さてこそありつれ」と答へ給ひき。これらの事にて、④よのつねの事ども、おもひはかるべし。⑤かくおは

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

せしかば、あはれ、問ひまゐらせばやと[d]おもふ事も、いひ出でがたくして、うちすぐる程に、うせ給ひしかば、さてやみぬる事のみぞ多かる。⑥よのつねの事共(ども)は、さてもやあるべき。※おやおほぢの御事、詳(つまびらか)ならざりし事こそくやしけれど、今はとふべき人とてもなし。

（『折たく柴の記』による）

※傷寒……激しい熱病。今でいうチフスの類に相当
※独参湯……煎じ薬の名。きつけに効くといわれる妙薬
※生薑汁……しょうがのしぼり汁
※おやおほぢ……父親と祖父

問一　空欄 1 に入るものとして、最も適切なものを次の中から選べ。

1　他はいひ　　2　善悪を知り　　3　初心を案じ　　4　義を尽し

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問二　傍線部①と同一人物が主語（動作主）であるものを、二重傍線部a～dの中から選べ。

1　a　　2　b　　3　c　　4　d

問三　波線部Aと同じ用法の「なむ」として、最も適切なものを次の中から選べ。

1　うぐひすは植ゑ木の木の間を鳴き渡らなむ
2　かの草をもみてつけぬれば、すなはち癒ゆとなむ
3　容貌もかぎりなくよく、髪もいみじく長くなりなむ
4　わびぬれば身を浮き草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ

問四　傍線部②はどのようなことか。最も適切なものを次の中から選べ。

1　この数日で病状が悪い方向に進んでしまうと、これまでと違った苦しい様子を人に見せるかもしれない
2　これまで頭が痛むことはあっても苦しくはなかったが、今回は命が絶えることもあるかもしれない
3　これまでの病気では出なかったような高熱でうなされて、ばかげたことを口走ってしまうかもしれない
4　これまで薬を服用せずとも病気は癒えていたが、状態が急変して薬を服用することになるかもしれない

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問五　傍線部③の説明として、最も適切なものを次の中から選べ。

1　何も言わないに越したことはない
2　何か言う時には細心の注意を払うべきだ
3　言わないのは卑怯だがしかたがない
4　言うべき時には伏線を敷かないほうがよい

問六　傍線部④と⑥が指す内容の組み合わせとして、最も適切なものを次の中から選べ。

1　④　日ごろの父の病状　⑥　世間一般のこと
2　④　日ごろの父の態度　⑥　世間一般のこと
3　④　世間一般のこと　⑥　日ごろの父の態度
4　④　世間一般のこと　⑥　日ごろの父の病状

問七　傍線部⑤が指す内容として、最も適切なものを次の中から選べ。

1　ア　いふべき事あればうちいひて、その余はみだりにものいはず
2　イ　よはひかたぶきし身の、いのちの限りある事をもしらで
3　ウ　我いまだ人にくるしげなる色みえし事もなかりし
4　エ　世の人熱にをかされて、ことばのあやまち多かる

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問八　本文と内容の合致するものはどれか。最も適切なものを次の中から選べ。

1　昔の人はあまり多く語らないことを美徳としており、父親もまたそれに従って寡黙な人であった

2　作者の父は口数が少ない人であったため、作者の母は父になぜ話さないのか普段から質問していた

3　父親は七十五歳のときに熱病におかされたが、医者がすすめる薬を断って一時は重体に陥っていた

4　若い人は病にかかったら効き目のある薬をすぐに飲んだ方がよいが、老人は効きすぎるのでよくない

問九　この文章の作者を次の中から選べ。

1　鴨長明　　2　新井白石　　3　荻生徂徠　　4　契沖

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第七講　復習問題

① 「判ぜさせ奉るに…」の「させ」について、文法的用法が同じものを次の中から選べ。

ア　しか申させたまひけるとぞ。
イ　この帝、貞観九年丁亥五月五日、生まれさせたまふ。
ウ　この宮に御覧ぜさせむとて、『三宝絵』は作れるなり。
エ　おほやけも許させたまひしぞかし。

② 「末の世にも集などにも入りなむ」の「なむ」について、文法的用法が同じものを次の中から選べ。

ア　よそ人にてまじらひたまはむ、見ぐるしかりなむ。
イ　その薬食ひたる人は、かく目をなむ病む。
ウ　よひよひごとに、うちも寝ななむ。
エ　さあらむ所に、一人往なむや。

③ 「かしこには□行くまじかめり。」の空欄に入るものとして、最も適切なものを次の中から選べ。

ア　え　　イ　こそ　　ウ　な　　エ　なむ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

④　次の空欄に入るのに、最も適切なものを後の中から選べ。

「いかでか信じ候ふ□」と。

ア　べき　　イ　べし　　ウ　べく　　エ　べかる

⑤　「僧都の御はらからにはただ女君ひとりにて、…」の傍線部はどのような意味か。最も適切なものを次の中から選べ。

ア　友人たち

イ　母が同じ兄弟や姉妹

ウ　同僚たち

エ　親類の人々

⑥　「世にふるをうき身と思ふわが袖のぬれはじめける宵の雨かな」の傍線部は掛詞になっている。掛けられている語の組み合わせとして、最も適切なものを次の中から選べ。

ア　「経(ふ)る」と「古(ふる)」

イ　「振る」と「降る」

ウ　「振る」と「古」

エ　「経る」と「降る」

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

⑦「安積香山影さへ見ゆる山の井の浅き心を我が思はなくに」の和歌の傍線部の説明として、最も適切なものを次の中から選べ。

ア　枕詞　　イ　序詞　　ウ　懸詞　　エ　縁語

⑧『和漢朗詠集』の撰者を次の中から選べ。

ア　藤原道長　　イ　源実朝　　ウ　藤原定家　　エ　藤原公任

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

テキスト解答・解説

Ⓒ RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

【第一講】

〈模範解答〉

問一　c　　問二　d　　問三　a　　問四　e
問五　c　　問六　b　　問七　d　　問八　b
問九　ああ、姫君がご両親にご同伴申し上げなさいますならば、今このような端近くで人目にふれるように外出なさることなどまさかないでしょうに。

〈現代語訳〉

そして、二三日にもなったので、（左大臣は姫君のご病状が）心配だというので、（姫君の）兄君である、中将殿を清水寺に遣いに参らせなさった。（中将殿は）紅葉や落葉の模様を織り出した狩衣を着て顔や身なりを整えて、すぐに行列の先導者、侍、御随身（などの従者）を召し連れて清水寺の西門にお入りになると、参詣する人も下向する人も、驚いて目を見張って拝見するが、（中将殿は）妹君のご病状が気がかりで「どうであろうか」とお思いだったので、「侍たちよ、早く早く」と言って、皆の者を急ぎ召し連れてお堂のあたりを騒がしい音を立ててお上りになる。ちょうどその時、急に空が曇り風が吹いて、激しく時雨が降ってきた。参詣する人や下向する人が大勢いる中に、年は十五、六歳ぐらいの姫君できわだって美しい姫君を、女房たちが四、五人で濡らすまいと立って（囲んで）隠している。中将殿は、これをご覧になって、自分が差していらっしゃった傘を、六位の進を通じてお貸しになる。姫君は、「これはどうしたこと」とお思いになって見上げなさったお目の中の気高さは、どこまでもかわいらしく美しくいらっしゃった。

さて、姫君は本堂の東の縁側にお立ちになって、「もう傘をお返ししなさい」とおっしゃった。中将殿は濡れながら待って傘を受け取りなさって、「この（傘をお貸しした）者たちはどこにいるのか」とお尋ねになると、「まだあちらに立っていらっしゃいます」と申し上げるので、すぐに使者を見にやらせなさるけれど、（姫君は）いらっしゃらなかった。さて、妹君のご病状は、

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

たいしたこともおありではなかったので、すぐにでもお帰りになるべきところだが、傘をお貸しした姫君のことが、気がかりでいらっしゃったので、「今夜はここでお籠りをして一晩中お祈りをしよう」と言って仏様の前に上の空でお座りになった。（姫君の居場所を）尋ねようもなく、どうしようもないので、ただしんみりと物思いにふけなさって、部屋にお入りになったけれど、心は落ち着かなかった。

　そうしているうちに、隣の部屋に誰かがお籠りをしてひどく人目をはばかっている様子だったので、妙に思ってあちこちから覗きなさると、部屋の中には几帳が引かれている。見るすべもなかったが、柱の節の抜けた穴があったところに紙を丸めて押し込んであった。（その紙を）引き抜いてご覧になると、（そこにいたのは、）あの傘を貸した姫君である。見ると胸がどきどきして覗き込んでご覧になると、時雨で濡れた衣装を脱ぎ置いて干して散らかし、姫君は綾羅の紫の夜具を引いて寄りかかって伏せっていらっしゃる。四十歳ぐらいの女房でこざっぱりした人がお側に寄って、巻貝をすりだした硯箱のふたに様々な果物や菓子などを整えて盛って、「これをどうぞ」と勧めたけれど、姫君は目をお留めにもならない。たいそう嫌そうなご様子で、（女房が）なんと申し上げても（姫君は）ご返事なさらないので、この女房が、申し上げるには、「いつものように、また、面倒なことよ。召し上がってくださいませ。なにかにつけお気の毒でございます。ああ、姫君がご両親にご同伴申し上げなさいますならば、今このような端近くで人目にふれるように外出なさることなどまさかないでしょうに。この清水寺参籠のついでに賀茂神社にもお参りしたいと思うのに、このようにぐったりなさってはどうしようか」と申し上げた。また、若い女房二人が、近寄って申し上げるには、「お生まれになって以来、今日が初めての徒歩での外出。仏もどれほど気の毒に思ってくださっているでしょう」と、このようにそれぞれに申し上げたけれど、姫君は寄りかかって伏せってぐったりなさったご様子で、（そのご様子すら）格別に美しい。

　さて、日も暮れようとしている。「参拝を始めたいわ」と言って、一二、三歳ぐらいのお仕えの少女を一人話し相手に残して、女房四、五人が連れ立って拝礼しに出て行った。その時に中将殿は、「ちょうどよい機会だなあ」とうれしくお思いになって、紅葉重ねの薄手の紙で、とりわけ美しい紙に手紙を書いてやりなさる。前書きの詞はなくて、

　たまぼこの…＝あなたと寺にお参りする道の途中ですれ違い、お見かけしてからというもの、二人の縁が前世からの深いものだとはお思いになりませんか。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

と、このように書いて随身をお呼びになって、「これを、隣の部屋に差し上げよ」と言ってお与えになった。そしてまた中将殿は覗きなさったところ、随身が遣戸をとんとんと叩くと、「どなたでしょうか」と言って出て来たので、「時雨の雨の時、お傘を差し出しなさった人からのお手紙でございます。姫君に差し上げてください」と申し上げると、お仕えの少女が受け取って中に入り、「お傘の持ち主からのお手紙です」と言って差し上げた。姫君は起き上がりなさって、「その手紙を持て」と言って持たせて、中を開けないでじっとご覧になって、「人違いでしょう。思い当たることがありません」と言って、お手も触れず、「その手紙の主に渡しなさい」と言って返しなさり、随身が「つれないことです」と申し上げると、「それならば手紙を受け取ったところに捨てよ」とおっしゃったので、（少女は）出ていって、（軒下の）雨の落ちる所に捨てる。そうなったからにはどうしようもなくて（随身は）受け取って帰った。中将殿は、どうしようかとお思いになった。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

〈重要単語〉　※「敬語」の「重要単語」は、文法講座で既出のため、省いています（第二講以降も同様）。

○おぼつかなし…①**はっきりしない。**　②**気がかりだ。**　③**待ち遠しい。**
○やがて…①**そのまま。**　②**すぐに。**
○ぐす【具す】…①備わる。　②**一緒に行く。**
○なのめならず【斜めならず】…並一通りではない。**格別である。**
○あいぎゃう【愛敬】…①温和でやさしく魅力的なこと。　②顔かたちがやさしくかわいらしいこと。
○あくがる【憧る】…①魂が身から離れる。うわの空になる。　②思いこがれる。　③**さまよい歩く。**
○ながむ【眺む】…①**物思いにふける。**　②じっと遠くを見る。
　【詠む】…**詩歌を吟じる。**
○ゆゆし…①おそれ多く慎まれる。　②**不吉だ。**　③**すばらしい。**
○あやし【怪し・奇し・異し】…**不思議だ。**
　【賤し】…**粗末だ。身分が低い。**
○こころぐるし【心苦し】…①**つらい。**　②心配である。　③**気の毒だ。**
○かち【徒歩】…**徒歩。**
○いとほし…①**気の毒だ。**　②いやだ。　③かわいい。
○ちぎり【契り】…①**前世からの約束。**　②**因縁。男女・夫婦の縁。**
○なさけなし【情け無し】…①**思いやりがない。**　②**無風流だ。**　③嘆かわしい。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

【第二講】

〈模範解答〉

問一　a　2　b　5
問二　ア　2　イ　3　ウ　3
問三　5
問四　A　1　B　3
問五　4
問六　1、4
問七　阿闍梨が、やはり女御には物の怪が憑いていると確信したこと。（二十九字）

〈現代語訳〉

女御のご出産の時期もお近づきになられたので、「松陰殿にお移りするのがよいでしょう」とおっしゃるけれども、（帝は）一夜の間もお離れになることをむなしくお思いになって（女御に）寄り添っていらっしゃったので、「宮中での出産は忌むと聞いていることだから」と言うので、（帝が）南殿で行われる宴にお出かけになった間に、人々が相談して（女御を）車にお乗せする。四条京極あたりを通り過ぎなさるころに、御簾の下から変な風が吹き込んで来たので、（女御は）ご気分が悪くおなりになって、たいそうひどくお苦しみになられたので、御供の者は皆、地に足のつかない様子で慌てふためく。「けれど、ここではどうしようもない。お車を急いで」と、言い騒ぐ。やっとのことで（松陰邸に）お入れ申し上げると、大臣も門の外までお出になられて、「これはどうしたらよいだろうか」とおっしゃって、一緒にお心が乱れるほどに（心配に）お思いになるけれど、（女御を）車からお降ろし申し上げて、（大臣は）お枕元を離れなさらないけれど、茫然自失の様子が深刻になりなさるので、「帝に申し上げるにしても、さぞかしご心配にお思いになるだろう」と恐れ慎みなさるけれど、「女御が危篤になったことを、帝にこのままお知

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

らせしないでおくことはできないだろう」とお思いになって、お知らせなさったところ、「やはりそうか。お名残が尽きそうになかったのは、こういうことであるのだろう」などと（おっしゃって）、その間際のことがお分かりになると、「（女御を宮中から退出させたのは、）いったい誰の策略だったのか。私も行かないではいられない」と、ひどく動揺なさるけれど、「軽率な行幸は、世間の人の思惑もございますので」と言って（お止めしたので）、世間で屈指の尊い僧たち、陰陽寮の役人、御宝の剣などをお遣わしになる。夜も昼もお使者の行き交う様子は、とても慌ただしい。

御修法の声は、絶える間もなく、護摩の煙は立ち続けているが、すこしのご効験さえもおありでないので、隠岐の島からお連れになった阿闍梨が、須磨からお帰りになるとおっしゃったのを、「ここまでいらっしゃって、故郷（の京都）をご覧にならないことがあるか」と伴っていらっしゃって、賀茂川の御堂に留まらせていたのをお呼びになって、このようなご病気で目の前が真っ暗になって、（大臣は）女御と一緒に死んでしまいそうなほど心配なさっている。もし女御がお亡くなりになれば、来世までも心の闇に迷ってしまいそうなので、死んでしまった時の葬儀の準備までご命令をなさって、涙ぐみなさるので、阿闍梨も「おいおい」とお泣きになって、「妊娠しているお身体には、物の怪などが憑く例がとても多くございます。もしそうなら、尊い僧たちが大勢いらっしゃるのだから、すぐにそれとお分かりになりそうなのに、日が経つにつれて病状が重くおなりになるようなことは納得がいきません。どんなに執念深い霊魂であっても、（私には）名前を告げるくらいの効験はあるでしょう。けれど、世間で物の数にも入らない身の上で、尊い方々の中に顔を出して加わりますのも、不審に思われるでしょうから、物越しにせめてお声だけでも聞きましたなら」とおっしゃるので、「どうして（遠慮することがあろうか）」とおっしゃってお連れになって、お屏風を隔てて（阿闍梨を）座らせなさったところ、奇怪なお声がして時々呟き込んでいらっしゃるので、（阿闍梨は）「案の定だ」とお思いになる。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

〈**重要単語**〉

○なやむ【悩む】…①**病気で苦しむ**。　②困る。　③うるさく非難する。

○ののしる【罵る】…①**大騒ぎをする**。　②評判が立つ。　③口やかましくいう。

○われかのけしき【我かの気色】…自分か他人かわからないほど、**正気を失っているさま**。

○さればよ…**やっぱりだ**。思ったとおりだ。

○おどろおどろし…①**気味が悪い**。　②**仰々しい**。

○みゆき【行幸】…**天皇のお出かけ**。
【御幸】…**院・上皇・法皇・女院などのお出かけ**。

○しるし【徴・験】…①前兆。　②**霊験**。効き目。
【標・印・証】…①目印。　②証拠。　③合図。
【著し】…①**はっきりしている**。　②予想通りだ。

○あまた…**たくさん**。

○やむごとなし…①捨ててはおけない。　②**格別だ**。　③**高貴である**。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

【第三講】

〈模範解答〉

問一　①ホ　⑧ニ　⑫イ　⑬ホ　**問二**　ロ　**問三**　ニ
問四　a イ　b ホ　c ヘ　d ホ　**問五**　ニ　**問六**　イ
問七　ハ　**問八**　ホ　**問九**　ロ　**問十**　ホ　**問十一**　ニ
問十二　イ　**問十三**　ハ　**問十四**　ロ　**問十五**　ホ、ヘ

〈現代語訳〉

その夜は（右近の少将は）内裏に参上なさって、（落窪の君のところには）おいでになることができなかった。翌朝（右近の少将から落窪の君に）お手紙がある。「昨夜は内裏に参上しまして、（そちらには）参上できませんでした。どんなに、あこぎが、惟成を責めたことでしょうかと想像するのもおかしく思います。（あこぎの）きつい性格は誰の性悪振りを見習ったのかと思うにつけても、恐ろしくて。今夜は『昔はものを』の歌に詠まれた心境です。

さらでこそ…＝あなたに逢わないでもその歌の通り「昔」は平気で時間が過ぎたものですが、（あなたに逢ってしまった今は）
逢わずに一晩過ごすことが悲しく感じられることです。

遠慮がちなことを多くお思いになってばかりいらっしゃるような境遇はもはやお離れになるのがよいのではないですか。気兼ねのいらないところを探しましょう」と細々としたことまで（落窪の君に）申し上げなさる。

「お返事を早く」と言って、「持って参りましょう」と帯刀は（落窪の君に）申し上げる。（右近の少将の）お手紙を、あこぎは見て笑う。「（あなたは私のことを）性格がよくないというようにお話し申し上げたのですね」と言い、「話せる人がいないので、あなたと自然と言い争ってしまうのです」と言う。

（落窪の君の返事は）「昨夜は『まだき時雨るる』の歌（＝おいでがないのであなたに飽きられてしまったのかと悲しんでおり

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ました」の心境でした。

一筋に…＝一途に私を思ってくださるお気持ちはなかったのだなあと思い、ますます憂鬱な私の身はどうしたらよいのかわかりません。

本当に、『憂き世は門させりとも』という歌にあるように（私はこの邸を）出にくいのです。あこぎは、『罪がある人は（私を）きっとこわがりなさるようです』（と言っていますよ）」と（書いて）あるのを（帯刀が）持って出たときに、「蔵人の少将が、まず（帯刀を）お呼びです」と言うようなので、（落窪の君から右近の少将にあてた返信を）どこか（安全なところ）に置くことができないまま懐に急いで入れて（蔵人の少将のところに）参上した。（蔵人の少将は）御髪を結わせなさろうとして（帯刀を呼びつけたの）であった。御後ろ（の髪）を結って差し上げるというので、蔵人の少将もうつむきになり帯刀もうつむいているときに、（帯刀の）懐にある手紙が落ちたの（だが、帯刀はそれ）を知ることもできないでいた。（蔵人の）少将が（手紙を）見つけなさって、ふと拾い上げなさった。御髪を結い終わって（三の君の部屋に）お入りになって、（この手紙が）興味深いので、三の君に「これを御覧なさい。惟成が落としたのだ」と言って（三の君に）差し上げなさる。「筆跡がとても風情がある」と（蔵人の少将は）おっしゃる。「（落窪の君）とは誰の事を言うのか。変な人名だなあ」（と言う。）「そういう人がいるのです。裁縫をする人です」と（三の君が）言って（その話は）終わった。三の君は、手紙をお持ちになって、妙なことだと思って座っていらっしゃる。

帯刀は、髪をすくのに用いた水の入れ物などを片づけて、立つときに（懐を）探ったところ、（落窪の君から預かった返信が）ない。胸騒ぎがして立ったり座ったりして体を振り払い、（衣服の）紐を解いて探すが、まったく見つからないので、どうなってしまったのかと思って、赤面して座っていた。ここよりほかに歩いたところはないので、落としたとしてもここにあるだろうと思って、御敷物をまず取り上げて振ってみるのだが、どこにあろうか、あるはずがない。人が取ったのだろうか、どのようなことが起こるだろうかと嘆かわしく思って、頬杖をついて呆然として座っているのを、（蔵人の）少将が外出しようとして御覧になって、「どうして惟成はたいそうしょんぼりしているのか。何かをなくしたのか」と言ってお笑いになるので、この方が（手紙を）拾って隠していらっしゃるようだと思うと死にそうな気持ちがする。（帯刀は）まことに切迫した様子で「なんとかして（手紙を返して）いただきとうございます」と申し上げると、「私は知らない。三の君が『末の松山』（＝帯刀があこぎから落窪の君

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

へと心を移した」という歌を言っていたようだ」と言って出て行かれた。

言いようもなくて、なんと未熟な、と（あこぎが）思うであろうことが身が縮まる思いだが、どうしようもないと思って、あこぎのもとに行って、「さっきのご返信を、自分が（右近の少将のところに）参上するときに直接持って参ろうと思って出たときに、（蔵人の少将が）このようにお呼びになって御髪を結わせなさっているうちに、こういう次第で取られ申し上げてしまった。たいそう困ったことだ」と正気を失った様子で言うと、あこぎは、「とても困ったことです。どんな大騒ぎが起こることでしょう。ますます、（北の方は）落窪の君に（男が通ってきている）様子があると疑っていらっしゃるのに、どれほど（落窪の君が）騒がれなさることでしょう」と、二人は、冷や汗をかいて（落窪の君を）気の毒がる。

三の君は、この手紙を北の方に「こういう次第で手に入ったものです」と言ってお見せ申し上げなさると、「思った通りだ。（男が通う）様子があると思っていた。（相手の男は）誰であろうか。帯刀が通っているのであろうか、帯刀が持っていたということは。（落窪の君を）『（自邸に）迎え入れよう』と言ったのであろう、『邸を出にくい』と（落窪の君の手紙に）書いてあるということは。結婚させないようにしようとしていたのに、ひどく残念なことだよ。男が出来たならば、決してこんなふうにしてはいないだろう。（男は落窪の君を）迎え取るだろう。（もし落窪の君が）いなくなったら（裁縫のできる人がいなくなるから）大変だ。かわいい我が子たちの召使いと決めていたのに。どんな盗人がこんなことをしたのだろうか。早く騒ぎだせば（男は落窪の君を）慌てて隠すだろうよ」（と言う）。（北の方は）この手紙も出させないで（騒ぎたてることもせず、落窪の君の）様子を見ているので、誰も騒ぎ立てないので、（あこぎや帯刀は）変だと思っている。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

〔重要単語〕

○つとめて…①**早朝。**　②**翌朝。**

○さがなし…①**意地が悪い。**　②口が悪い。　③**いたずらだ。**

○つつまし【慎まし】…①**遠慮される。**　②**恥ずかしい。**

○こころやすし【心安し】…①**安心だ。**　②親しい。　③簡単だ。

○まだし【未だし】…①**まだ早い。**　②**未熟である。**

○いとど…①**ますます。**　②そのうえさらに。

○すむ【住む】…①居住する。　②**夫として女のもとに通う。**

○あふ【逢ふ】…①出会う。　②適合する。　③**男女が契る。結婚する。**　④対抗して争う。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

【第四講】

〈模範解答〉

問一　c　**問二**　a　**問三**　d　**問四**　e

問五　c　**問六**　b　**問七**　d　**問八**　e

問九　ただ根拠としてひかれる歌を伺って、心の疑問を断ちたいと思うのです。

〈現代語訳〉

今朝はしも……＝霜の降りた今朝は、私を愛してくれるような人は便りがあったでしょうに。「つま」のいない寝室はどうであるかと。

問う、「女の歌で、〈男のことを〉〈つま〉と詠んでいいのだろうか。ただ、〈つまなきねや〔＝「妻」のいない寝室〕〉と詠んでいるのは、そのままでは根拠がないように思われる。〈つまなきこひをわれはするかな〔＝恋人もいないのに私は恋をしているよ〕〉という歌を思っているのだろうか。それなら根拠があることだが」。

答えて言う、「この質問はどういうことでしょうか。ただ長年知っておりますようなのは、〈つま〉ということは、男女の仲は、互いに〈つま〉というと知っております。男は女を〈つま〉といい、女も男を〈つま〉というそうだ。女（のことだけを）を〈つま〉というべきだと（いう説）は何に出ているのか。これは根拠としてひかれるべき歌が多くあるでしょうか、いや、ないでしょう。まず『伊勢物語』に、〈つまもこもれりわれもこもれり〉という歌（があり、その歌）は、女の歌で、男が武蔵野に隠れていたところ、（その）野を焼こうとしたので、女が詠んだのです。〈つまもこもれり〔＝「つま」も隠れている〕〉とは、自分の夫（のこと）をいったのだろう。〈われもこもれり〔＝私も隠れている〕〉とは、女自身のことであろう」。

また問う、「（あなたが）おっしゃっていることは、道理がある。世間に歌枕（という本）があるようですが、多くは女を〈つま〉という。あるいはまた、〈わかくさ〉という。またある本には、（あなたが）おっしゃるように、男女の仲を〈つま〉という

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

とも書かれてあるように思われるので、どちらか一方に決まっているだろうとも申しにくい。さて『伊勢物語』は、その歌の意味を考えますと、もしかしたら書き間違えたのではないだろうか、とも思うのです。その理由はこれは、男が、人の娘を盗んで、武蔵へ連れて来たところ、（男は）盗人だったので、国守に捕らえられてしまった。女を草むらの中に置いて去ってしまったので、道行く人が、〈この野はぬす人あなり〔＝この野には盗人がいるそうだ〕〉と言って火をつけようとしたので、女が詠んだと書いてあるようです。したがって、二人とも隠れているとは書いていません。これは前の歌（の解釈）と違っている。また、〈わかくさの〉というのは、男の言葉として言われたのでしょうが、女が急に男を若いというのも道理に合わない。また、〈わかくさ〉ということは、妻をいうと（本に）あるようですから、〈あしひきの山〉〈あらたまの年〉などというように、〈わかくさのつま〉などと（「つま」にかかる掛詞として）詠まれているようです。またこの歌を『古今和歌集』に、〈題、よみ人しらず〉と書いて、（「武蔵野」を）〈春日野（かすがの）〉と改めて（載せて）いるようですから、このことからも（この歌を女が詠んだとするには）疑いが残るのだ。『日本書紀』に、須佐之男命（すさのをのみこと）が〈いづもやへがきつまごめに〔＝出雲の八重垣。妻をこもらせるために〕〉と詠み、また明日天皇〔＝明日、天皇〕が皇后に贈る歌に、〈あひおもふつま〔＝互いに思いあう「つま」〕〉と詠んでいますよ。また『万葉集』には、たくさんのことも、どのようにでも書かれてあるものですので、決めにくいのですが、〈妻〉と書いて〈つま〉と読み、また〈嬬〉をも〈孋〉をも〈つま〉と読んでいるようです。したがって辞書に、〔「つま」とは〕「妾の意味である」と説明されています。（表記が）決まっていないとはいえ、そうはいってもやはり〈春〉の字を〈秋〉と読み、〈雪〉を〈霞〉とは読まれないでしょう。地名でも、〈朝妻〉〈吾妻〉を〈（あさ）つま〉〈（あ）づま〉と言い伝えています。親しい者を〈つま〉と読むならば、〈夫〉の字、〈父母〉〈兄弟〉の字をも、〈つま〉と読まれているのではないでしょうか（、ですが、読まれることはないです）。しかしながら、（和泉）式部は中古の（歌の）名人ですから、男を〈つま〉と読んでいますので、理由があるのでしょう。したがっていちずに非難することはできません。ただ（私は）根拠としてひかれる歌を伺って、心の疑問を断ちたいと思うのです」。

予〔＝作者である藤原清輔〕がこのことを考えると、『万葉集』に、松浦佐夜姫を詠んだ歌に言うには、

とほつひと……＝（領巾振峰（ひれふりのみね）というのは）松浦佐夜姫が〈つま〔＝夫〕〉を恋うて領巾（ひれ）を振って以来ついている山の名前だ。

このように男（のこと）をも〈つま〉というのか。また言うには、

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

たなばたの……＝織女（たなばた）〔＝織姫〕が〈つま〔＝彦星〕〉を待っている今夜の秋風に〈吹かれていると〉、私までわけもなく人恋しい。

このようにありますので、男（のこと）をも〈つま〉というのだろう。

〔重要単語〕

○よしなし【由無し】…①**理由がない**。②**手段・方法がない**。③関係がない。④無益だ。⑤よくない。

○おぼゆ【覚ゆ】…〔自動詞〕①**自然に思われる**。②思い出される。③**似る**。④（他人から）思われる。
〔他動詞〕①思い浮かべる。②記憶する。③思い出して語る。

○としごろ【年頃】…**長年**。

○たがふ【違ふ】…①**くい違う**。②そむく。③変わる。④行き違う。

○ゆゑ【故】…①**原因・理由**。②趣。③**由緒**。④**縁故**。

○よろづ【万】…①万、**数が多いこと**。②**万事**。

○ともかうも〔＝ともかくも〕…①どのようにでも。②（〜＋打消）どちらとも（〜ない）・なんとも（〜ない）。

○さすがに…**そうはいってもやはり**。

○あやなし【文無し】…①**道理がたたない**。わけがわからない。②**むなしい**。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

【第五講】

〔模範解答〕

一

問一 a 4　b 2

問二 A 1　B 4

問三 3

問四 5

問五 1、6

問六 元悪人であればかえって肝が据わって良い働きをすると評価した。（三十字）

二

問一 a 1　b 5

問二 A 2　B 4

問三 3

問四 3、5

問五 定業の道理も知らずに、自ら命を捨てようとした行為。（二十五字）

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

〈現代語訳〉

一　大殿・小殿といって評判の強盗の首領がいた。大殿は、後鳥羽院の御治世に捕らえられた。小殿が、高倉の判官章久のもとへ行って言ったことは、「長い年月捕らえることができなくて、探し求められております小殿と申します強盗が思うところがあって参上しております。すぐに（私の身柄を）お受け取りください」と言う。章久は信じがたく思われながら、おおざっぱに事情を尋ねると、小殿が言うことには、「（あなたが）疑わしいとお思いになりますことは、当然でございますが、まずお考えくださいませ。ただの何の関係もない人が強盗だと自分で名乗って、（お役所に）命をまかせ申し上げて何の甲斐がありましょうか」と言うので、なるほど当然で、（章久が）詳しく尋ねると、小殿が言うことには、「長年西国の方で海賊をし、東国では山賊をし、京都では強盗をし、田舎では追いはぎをして生活してきたのだ。このような重い罪の身を受けてしまっておりますので、この世でも安らかな心はございません。夜は安らかにも寝ず、昼も心がくつろぐことはない。世の中が恐ろしく、人目がはばかられることは、悲しい苦しみでございます。それにしても一生平穏でいることができる身でもありません。最後にはきっと捕らえ出されて恥をさらし、悲しい目を見るでしょうから、人手にかかるよりは、自分から参上して、同時に長年の罪をも償うために、くびを伸ばして〔＝命をお任せして〕参上しております」と言うので、章久はしみじみ殊勝だと思われて、躊躇せず（身柄を）受け取るべきだが、そのことはなくて、答えたことは、「今は検非違使庁の庁務は停止しているのだ。すでに聞き及んでもいるだろう。長年作っておいた牢獄はすべて壊して仏堂に作り直すなどして、すべて検非違使庁の仕事をやめて、来世の安楽を祈っているのだ。徳大寺殿〔＝藤原実基〕にお仕えする源の判官康仲がただいま格別に手柄を立てようとする人だ。あそこに行ってこの事情を言うなら、きっとうれしく思うだろう」と言うので、（小殿は）「そうでございますならば、（あなたの）お手紙を頂戴しまして、源の判官殿へ参上しましょう」と言うので、（章久は）「それは簡単なことだ」と言って、手紙を書いて与えたので、（小殿は）すぐに持って康仲のもとへ行って、章久のもとで言ったように言って、「もし万が一、命を助けて、召し使ってくださるなら、特別の奉公としては、残党が数多くおりますのを、一人一人捕らえさせ申し上げよう」と言うので、康仲はおもしろいことだと思って、受け取って使った。

（康仲が）俸禄三十石を与えて毎日召し使うと、（小殿は）働きぶりがしっかりしていて大事なことが多かったので、大納言家

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

るべき役に立つ方面もあるのだ。私に与えよ。召し使おう」とおっしゃったので、（康仲は実基に小殿を）差し上げた。（実基は小殿が主君のそば近くに）お仕えすることをお許しになって召し使いなさった。康仲の与えた手当の上に、五十石の俸禄をお与えになったので、小殿は喜んで、「今はこうして一生我が身が安らかで終わるだろうから、思うことはございません。お仕えする間には、決して宮中および（実基様の）お近くには無法なしわざはさせません」と言って、ひたすら夜も泊まって勤めをしてお仕えしたので、本当に頼もしくてそのあたりには夜の（犯罪等の）恐れがなかった。

（＝藤原実基）にこの様子をこっそり申し入れたところ、（実基は）「とてもおもしろいことだ。そのような者は、かえってしか

二　十二歳のとき、思ったことは、「ものごとを正しく分別する方法を求めて、人として守るべき道理を聞かないならば、無駄に時間を費やして、仏教の修得に役立つことがあるはずがない。大いなる損失である。ましてまた死はすぐにやってくる。だから、万事すべきことを後まわしにしてはならない。急いでものごとを正しく分別する方法を求めて、さらに山深い物静かなところに閉じこもって修行しよう」と思って、「すぐにも高雄山を出よう」と思った。そこで薬師堂に詣でて別れを告げ、また鎮守八幡大菩薩にも別れを告げて、「夜明け前の薄暗いころに、出発しよう」と思って寝た夜の夢に（見たことは）、もう高雄を出て、三日坂まで下りたところ、道に大蛇が、頭をもたげて横たわって向かってくる。また、八幡大菩薩のお使いとして、大きな蜂で四、五寸ぐらいである蜂が、飛んで来て言うことには、「おまえは、この山を去ってはいけない。もし無理に去るならば、この先困難に遭うだろう。まだ（次の段階に進む）時機には至っていないから、（今、高雄山を出てしまったのでは）仏道修行を完成させることができない」と言うと思って、（そこで）夢が覚めた。「それではわけがあるのだろう」と思ったので、このときは思いとどまった。

十三歳のとき、心に思ったことには、「今はもう十三歳になった。すでに年老いている。死期がきっと近づいているだろう。老少不定の習いなのに、今まで生きているのが不思議である。古人も『学問や修行は火をおこすように敏捷にせよ』と言っているのに、ゆったりとして過ごしてはならない」と、自らに鞭打って、昼夜を問わず（境地が）退行しないように修行に邁進した。ある時は後ろの山の、木の空洞に木の葉が深く積もっている上に常に行って座って（冥想し）、ある時は洞察が得られるように、「このように身体があるから、いくばくかの煩いや苦痛があるのだ。命を捨てるならば、それに優ることはない」と思って、ど

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

のような犬、狼、狐などにも食われて（死んで）しまおうと思い、墓地へ行って横たわっていると、夜が更けて犬がたくさん来て、そばにある死人などを食う音がしてからからと鳴り響くが、私を念入りに嗅いでみて、食うこともしないで、犬たちは帰った。恐ろしさはこの上もなかった。このことを考えるに、それではどんなに身を捨てようと思っても、（前世からの宿命として）定められた時期でないならば死ぬことはできないのだと知って、その後は（死のうという）思いはなくなった。「大人になってから、このことを思うと、その当時の洞察によって死んでいたならば、なさけないことであったことだろう。浅はかなことをしたものだよ」とおっしゃって、ご自分でお笑いになった。

〔重要単語〕

○きこえ【聞こえ】…**うわさ・評判**。

○ひごろ【日頃（日来）】…①**数日**。　②平常。

○げに…①現実に。**なるほど**。　②**ほんとうに**。

○ことわりなり【理なり】…**もっともである**。

○やすし【安し】…①**安らかだ**。**心が穏やかである**。　②安っぽい。

○あはれなり…①**しみじみと心を動かされる**。　②趣がある。　③さびしい。　④かわいそうだ。　⑤かわいい。　⑥情が深い。　⑦すぐれている。

○さうなし【左右無し】…①**どうとも決まらない**。　②**ためらわない**。

○やぶる【破る】（四段）…①**こわす**。　②傷つける。　③乱す。　④敵を負かす。

○いたづらなり【徒らなり】…①**無駄だ**。　②**むなしい**。　③何もない。　④ひまである。

○ひま【隙】…①**すきま**。　②絶え間。　③時間のゆとり。　④機会。

○おとなし【大人し】…①**大人びている**。　②**思慮分別に富む**。　③おもだっている。

○あさまし…①**驚きあきれる**。　②嘆かわしい。　③話にならない。　④程度がはなはだしい。

○はかなし【果敢無し】…①はかない。　②**無益だ**。　③たわいもない。　④たいしたことではない。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

【第六講】

〔模範解答〕

問一 ハ　問二 ② ホ　③ ロ　④ イ　⑥ ニ　問三 ハ
問四 イ　問五 ホ　問六 ロ　問七 ⑩ イ　⑪ ニ　問八 ハ
問九 ⑬ ト　⑭ ニ　⑮ ハ　問十 ロ　問十一 ⑰ ロ　⑱ ハ　㉒ ニ
問十二 ロ　問十三 ハ　問十四 イ

〔現代語訳〕

遠くない世のことであったでしょうか。（都の）四条あたりに、中納言で右衛門督を兼任している人がいらっしゃった。（その人には）中将殿という御子様が一人いて、（御子様が一人だけなので）寂しくお思いになっていたところ、ようやくのことで（次の）子どもがお生まれになった。将来性が見えて容貌がとてもかわいらしくていらっしゃったので、この上もなく大切に養育しなさる間に、父の卿はお亡くなりになった。頼りとするものがない様子でいらっしゃったので、中将の君が弟君を可愛がって、（弟君は中将の君のもとで）十歳ぐらいまで過ごした。その間に比叡山の横川に禅師の房といって、この子の叔父（の僧）でいらっしゃった。（禅師の房が）中将に申し上げなさる。「この若君を、何もなく育てなさるよりは、比叡山に上らせて物事を習わせなさってくださいよ」などと時どきお勧め申し上げなさったので、横川へ上らせなさった。いずれの学問にも和歌の方面にも熱心に取り組んで、文字を書く方面にも（未熟とは言えないくらい）しっかりしていて、ちょっとした冗談もその場にふさわしく、心遣いも他の人にすぐれていたので、比叡山中の僧がかわいがり、稚児僧たちも親しいことに思っていた間に、三年ほどこの比叡山で月日を過ごしたのであった。そういうわけでこの（若君の）母君が長らく（我が子の姿を）見ないのは悲しいと言って、ちょくちょく（使いをやって）実家に呼び戻そうとしていたので、ある時、禅師の房が（母君に）申し上げなさったことは、「（若君は）学問の方面も上達が早く賢い人である。法師にして亡き父君の後世をも弔わせなさいよ」などと熱心にお話し申し上げなさ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

るので、（母君は）「せっかくの容貌を僧がまとう衣服にする〔＝出家させる・法師にする〕のも嘆かわしく、雲が幾重にも重なってわき立つ山奥に（若君が）交じるのもつらい」などとおっしゃって、受け入れる返答もなさらないのでどうしようもない。こうしてその後には（若君がこのまま比叡山に住み続けると）不安だとお思いになったのだろうか、都に住ませようということを中将にも申し上げなさると、（中将も）手持ち無沙汰な時の気慰みにも（弟がそばにいた方がよい）とお思いになったのだろうか、（母君と）同じ気持ちだとおっしゃったので、禅師もどうしようもないと思って、泣く泣く（若君を）都へ送った。この若君も横川に住み慣れなさったので、（都に比べて）寂しく感じた自然の風景にも名残が多く、一緒に遊んだ稚児僧にも別れ離れることが悲しかった。（若君と親しかった僧たちは）みな都近いあたりまで見送りに来て名残を惜しんだ。そうして禅師が（比叡山に）帰って、（若君が）長年手習いなどをして住みなさっていたところを引き開けて見なさると、とても見事な筆跡でふすまに書き付けなさった（歌があった）。

九重に……＝都の母君のもとに帰るとしても、長年にわたって住み慣れた奥深い山で見た月は忘れまい。なれ親しんだ横川の禅師のことも忘れません。

これを見て、禅師の君をはじめとして、みな泣いた。こうして（若君は）後には元服して藤侍従と申し上げた。元服して髪をあげても、前より姿が悪くなることもなく、ますます目が覚めるほどの（すばらしい）容貌でいらっしゃった。（藤侍従が）十四歳におなりになった春の頃だったろうか、（藤侍従が）もとなれ親しんだ横川の法師や、また都の中でも優美な容貌の男たちがたくさんやってきて、「北山の桜がいま盛りであることを人々が申すようです。藤侍従の君もご覧になってくださいよ。お供申し上げましょう」と口々に言うので、山の奥深く隠れて咲く花の色香も特に見たい心地がして、急に（花見をしようと）思い立った。（北山に向かう）道中も人目が気恥ずかしいので、わざと質素な身なりをしてお出かけになった。若い者たちが馬を並べて道中（の風景）を眺め渡すと、遠い山の端がうっすらと霞んでいて、野辺の景色が緑一色で、生い茂る草の中にも名も知らない花などが、すみれに交じり色とりどりに咲いていて、雲の中の雲雀は姿も見えずさえずり合っている様子などは、何とも言いようがないほどすばらしい。目的地の山はやや奥深く入るところで、（川の）水の流れや岩の有り様も、風景画を見るように思われた。わずかに吹く風にほのかに匂ってくるので、人々は心引かれて急いで登りながら見ると、数え切れないほどの花が枝もたわむまで咲いていて、今日来なかったら散ってしまったに違いないと思われた。人里遠い山奥にもかかわらず、都の方の

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

人と見えてたくさん集まってきて、木の根元や、岩隠れの苔の上に群れ集まっては、歌を詠み酒を飲んで管弦の遊びなど様々に見えた。藤侍従の君は花に眺め入って座っていらっしゃったところ、花よりもこの（藤侍従の）君（の美しさ）に目を奪われた人がたくさんいて、後を慕って来る者がいるのも何となく煩わしく感じられるので、人には邪魔されず、花を眺めるには都合のよい、奥まった所があればなあと、願い求めながら行くと、本堂の傍らに、本寺に付属する寺院であろうか、檜皮の軒が朽ち忍草が伸び放題で、破れている御簾を掛けている寺院がある。藤侍従のお供の人の中にここを知る縁がある人がいて、ここにしばしの滞在場所をしつらえた。短冊を取り出し詩歌を吟じたりなどした。都から持たせた、食べ物を入れて持ち運ぶ檜破子や、酒などを入れた竹筒などのようなもので、旅の食事を簡素にしながら興じる。

〔重要単語〕

○さうざうし…**物足りない。心さびしい。**
○かたち【形・容・貌】…①**姿。**　②**容貌。**　③ようす。
○うつくし【愛し・美し】…①**かわいい。**　②きれいだ。　③立派だ。
○ものす【物す】…①**ある。いる。**　②**いろいろな動詞の代わりに用いる。**
○かしづく【傅く】…①**大切に育てる。**　②大切に世話をする。
○はかなくなる【果敢無くなる】…**死ぬ。**
○たづきなし【方便無し】…たよりとするものがない。手段がない。
○らうたし…**かわいい。**
○つきづきし【付き付きし】…**似つかわしい。ふさわしい。**
○むつまし【睦まし】…親しい。
○ねんごろなり【懇ろなり】…①**親切なさま・丁寧なさま。**　②**親しみ深いさま。**
○かたらふ【語らふ】…①話をかわす。　②**親しくつきあう。**　③**男女が言いかわす。**　④誘い入れる。
○あたら【惜】…もったいない。せっかくの。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

○やつす【窶す】…①**目立たないように姿を変える。**　②**出家する。**
○いらふ【答ふ・応ふ】…**答える。**
○つれづれなり【徒然なり】…①**手持ち無沙汰なさま。**　②どうしようもなく物思いに沈むさま。
○て【手】…①**文字・筆跡。**　②所作。　③**腕前。**　④手段・方法。　⑤負傷。
○よし【由】…①**由緒。**　②**方法。**　③**理由。**　④風流。　⑤次第。　**～とのこと。**　⑥縁。　⑦ようす。
○ことに【異に・殊に】…①**格別に。**　②なお。
○ゆかし【床し】…①**見たい。聞きたい。知りたい。**　②なんとなく**慕わしい。**
○にはかなり【俄なり】…**急なさま。突然だ。**
○わざと【態と】…①**わざわざ。**　②正式に。　③特に。
○いはむかたなし【言はむ方無し】…何とも言いようがない。
○むつかし【難し】…①**不快である。**　②わずらわしい。　③気味が悪い。
○やる【破る】（下二）…破れる・壊れる。
○たより【便り・頼り】…①**頼みにできるもの。**　②**縁。**　③手紙。　④便宜。　⑤**機会。**　⑥できぐあい。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

【第七講】

〈模範解答〉

一

問一　1	問二　4	問三　2	問四　1	問五　3
問六　2	問七　4	問八　1	問九　4	問十　2

二

問一　4	問二　3	問三　3	問四　1	問五　1
問六　2	問七　1	問八　1	問九　2	

〈現代語訳〉

一

若い男が骨董や芸能に趣味があるのはよい。人前で、自分こそ巧者らしく思われるふりをして目利き自慢をするのは、たいそう見苦しい。目利きは、ものの価値を一目で見抜くけれども、分からないふりをしているのがよい。これはどんなことでも同じで、ものごとは分からないふりをしているのがよい。知ったかぶりをすることはよくないことである。

人が弾く三味線や、人が弾く琴も、人が弾く胡弓なども、たとえ内心上手だとは思えなくても、少しでも自分に経験があれば人の芸の良し悪しは分かるものだが、口に出して悪く言うべきではない。どれほどすぐれた芸があったとしても、人の芸に非難を言うことは（悪い）芸人根性であって、身分のある人のすることではない。同業者どうしが互いを敵視することで卑しいことである。私が書いた『青楼式』に、「身分のある者は、どうあれ芸については知らぬふりをするのがよい」ということも、これと同じ趣旨である。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

総じて芸があるのは、太鼓持のようでよくないことであるとは言いながらも、もろもろの芸はどれも人に褒められたいと思う気持ちがあるから精進して稽古をする。精進して稽古をするから上達する。上達するから、人の（芸）が悪く見える。（人の芸が）悪く見えるので、人を軽んじた態度をとりたくなるのも、日蓮宗の僧侶の目に浄土宗の善導大師が憎く見え、浄土宗の僧侶の目には日蓮の頭がひどく気にさわって嫌に見えるのも、ただ身を立てたい（＝自分の芸を世間に認めてほしい）ということなのである。自分の芸を世間に認めてほしいということは、悪いことかというと、その（認められたいという）気持ちがなければ一日たりともこの世の中は成り立たないものである。

老子経に、「大道すたれて仁義あり」と言ったように、仁義・五常といった教えがすっかり無くなってはじめて、自然と仁義や五常が人々の心にあるのである。荘子が、「聖人生じて大盗の道がおこる」と言ったように、聖人（＝孔子）が生まれなさって、金（＝「仁」のこと）と言い銀（＝「義」のこと）と言い、礼と言い智と言い、こうすればよい、ああすれば悪いと教えなさったから、戸を閉め錠前と鍵をかけるのはどうしてか、錠前と鍵をかける理由はどういうことかと言って、ものごとの根本にまで立ち入って聞いた時、泥棒に盗まれはしないかということを用心する、用心する気持ちが元となって、では自分も、人のものをただ盗むにはこうすればよいのだということをすっかり理解してしまったために、聖人が世に表れて泥棒の道がさかんに世に広まるという。

芸もそれと同じだ。総じて、紙細工をするには糊というものを使ってこしらえるけれども、その糊気が少し残っても、虫が付いたりこわばったりするようだ。魚を塩に漬けて置くと、その塩気を抜いてから食わねばならないのと同じだということも、『庖志』に書かれている。以上のように芸には精進せねばならないけれども、精進を重ねてその芸が上達したら、自分のこれまでの努力に執着する心をすっきりと捨て去るべきである。

二

昔の人は、言うべきことがあれば言うが、それ以外はむやみにものを言わず、言うべきことも、非常に言葉多くなく、その真意を言い尽くしたのだった。私の父母であった人々もこのようでいらっしゃった。父でいらっしゃった人が七十五歳におなりになった時に、激しい熱病にかかって、今にも死にそうになられた時に、医者が来て「独参湯をすすめよう」と言うのである。（父

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

は）常日頃人に戒めなさったことには、「年若い人はどうしても構わないだろう。年老いた身で、命に限りがあることも知らないで、薬のために息苦しそうにして臨終を迎えるのはよくない。よくよく気をつけよ」とおっしゃっていたので、「これはどうであろうか」と言う人がいたが、急な病気でとても息苦しそうなのが、見申し上げるのもつらいほどだったので、生姜汁に合わせてすすめたところ、（父は）それから息を吹き返しなさって、ついにその病気は治りなさった。後に母であった人が、「どうして、病気の間は人に背を向けて寝ていらっしゃるばかりで、何もおっしゃることがなかったのですか」と尋ね申し上げなさったところ、「それは、頭痛がとてもひどく、自分はまだ人に苦しそうな様子を見せたこともなかったのに、いつもと変わったことが起こったなら、そのようにはいられない。また世間の人が熱に冒されて、わけの分からないことを言うことが多いのを見るにつけても、『何も言わないに越したことはないだろう』と思ったので、そうしていたのだ」とお答えになった。これらのことで、日ごろの父の態度も、推測できるだろう。このようでいらっしゃったので、「ああ、お聞き申し上げたい」と思うことも、言い出しにくくて、そのまま過ぎていくうちに、お亡くなりになったので、そのままになってしまったことばかりが多い。世間一般のことについては、そうでも構わない。父親と祖父のことを、詳しく聞けなかったことは残念であるが、今はもう尋ねることができる人もいない。

〈重要単語〉

○すべて【総て】…①全部で。　②**総じて**。　③（「＋～打消」の形で）**まったく**（～ない）。

○うす【失す】…①消える。　②**死ぬ**。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題解答

Ⓒ RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第一講　解答解説

〈解説〉

①　**問1**　本文「三十に今ぞ及ぶらむとおぼゆるほどなる人、高欄のもとにて和琴を弾くあり。頭つき、様体ほそやかに、**しなしなしく、きよらなるに、髪のいとつややかにゆるゆるとかかりて、めやすき人かな、**と見ゆる」部分が、設問該当箇所。選択肢を横に見ると「三十に手が届くかと思われる人で、髪の様子や姿がほっそりとして、」は共通。その後ろの部分と該当本文箇所（太字部分）を対応させる。まず、本文で「めやすき人かな」と褒めているので（「めやすし【目安し】」は重要単語で、「見苦しくない・感じがよい」の意味）、「感じの悪い」となっているc、dは削る。「しなしなし」が重要単語ではないが、この前後でずっと褒めているのに、ここだけけなしているとは考えにくいことから、プラスの意味の単語であろうとは予測がつくはず。よって、「なよなよとして」や「派手」という表現が入っているa、eも削る。全体に褒めているbが正解。

問2　本文「紅か二藍かのほどなめり、いと白く透きたる好ましげなる人、すべり下りて、長押に押しかかりて、外ざまをながめ出でて、琵琶にいたく傾きかかりて、かき鳴らしたる音、聞くよりも、うちもてなしたる有様、かたち、いと気色ばみ、**なつかしくなまめき**、こぼれかかれる額髪の絶え間のいと白くをかしげなるほどなど、まことしく優なるものかな、と見ゆる」部分が、設問該当箇所。選択肢を横に見ると「たいそう色白で透き通るような美人で、かき鳴らした琵琶の音色を聞くとすぐに身のこなしや容姿が際立ち、いかにも」は共通。本文の太字部分の「なつかし」と「なまめく」の単語の意味で解ける。どちらも重要単語。「なつかし」は「心がひかれる・親しみやすい」。「なまめく」は「優美だ・上品だ」の意味。よって、どちらの解釈もきちんとできているdが正解。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

②　本文「（中納言）『**ゆくりなくあはつけき振舞は、おのづから軽がろしきことも出でくるを**』と、**ありがたくおぼしをさめたる心なれど**、我ながらあやしく鎮めがたきを…」部分が、設問該当箇所。選択肢を横に見ると、後半部分「…中納言ではあったが、今夜に限っては自分でも不思議なくらい心が鎮めがたい、と感じていた。」が共通。よって、太字部分が重要であるが、実はこの設問も「ゆくりなし」と「ありがたし」の単語の意味で解ける。どちらも重要単語で、「ゆくりなし」が「思いがけない・突然だ」、「ありがたし」が「めったにない・（めったにないほど）すぐれている・生きながらえにくい」の意味。「突然の」と「普通には見られない」と、どちらの意味もきちんと解釈しているcが正解。

〔解答〕

①　1　b　　2　d

②　c

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第二講　解答解説

〔解説〕

① 「に」の識別。問題文中は、「にや、」の「に」。「にや・にか・にこそ」で、その下が「、」か「。」の場合は、「**あらむ**（**あらめ**）」が省略されており、「に」の下に「**あり**」がある形から、「断定」の「に」と判断（「思ひなし」は「気のせい」という意味の名詞）。選択肢のイも、連体形に付いており、「に」の下に「**あらず**」と「あり」がある形から「断定」。ちなみに、ロとホは格助詞「に」。ロのように、同じ動詞を重ねて、動詞の連用形についている「に」は、強調の働きの格助詞（〈例〉「泣き**に**泣く」など）。ホのように、動作の目的を示す働きの時も、動詞の連用形につく。ハは、接続助詞「に」。ニは、「ひたぶるに」で一語の形容動詞。

② 「結びの省略」の問題。先ほどの①でも触れたが、「にや、にか」の後ろが省略されていたら、「あらむ」を補う。よって、正解はロ。

③ 「おこたる」は重要単語で、「病気がよくなる」の意味。よって、正解はハ。

④ 「～に（は）しかず」は、漢文で「比較」を表す基本的句法。「～には及ばない。～の方がよい」という意味（「百聞は一見にしかず（＝人から百回聞くより、自分で一回見た方がよい）」で覚えておくとよい）。よって、「～に優ることはない（＝～の方がよい）」という解釈の、ニが正解。「帰寂」の意味は、選択肢より「命を捨てる」だと予測できる。ちなみに「したら**ん**に」の「ん（＝む）」の意味は、文中で、下が助詞から「仮定」。

⑤ 「あれ」なのでラ変動詞の已然形。「已然形」＋「ば」＝「順接確定条件」である。よって、正解はニ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

⑥「さればよ」は重要単語で、「やっぱりね」の意味。よって、正解はホ。

〔解答〕

①イ　②ロ　③ハ　④ニ　⑤ニ　⑥ホ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第三講　解答解説

〔解説〕

① 古文常識問題。干支で「方角」や「時間」を表す。坤は南西。よって、正解はイ。方角の確認をしておくと、「子」＝「北」、「丑寅（艮）」＝「北東」、「卯」＝「東」、「辰巳（巽）」＝「南東」、「午」＝「南」、「未申（坤）」＝「南西」、「酉」＝「西」、「戌亥（乾）」＝「北西」である。

② 「なり」の識別。設問の「なら」は「存在」の「なり」。よって、「なり」の上が「西」と方角（場所）になっているロが正解。

③ 「な〜そ」は「〜するな・〜しないでくれ」の意味。禁止の選択肢はニとへだが、やわらかい禁止のニュアンスはへ。さらに「つかはす」は「派遣する」・「与ふ」の尊敬語、もしくは、尊敬の意味を失い「派遣する」の意味の単語。ここでは「与ふ」の尊敬語で、「おやりになる」（＝「お返しになる」）の意味。選択肢ニの「お〜する」は謙譲の訳し方で、「つかはす」には謙譲語の意味はないので×。よって、正解はへ。

④ 古文常識問題。「方違へ」は、天一神（なかがみ）などのいる方角を避けること。行く方角がこれに当たると災いを受けると信じ、前夜吉方の家に泊まり、そこから方角を変えて目的地に行った。よって、正解はロ。

⑤ 古文常識問題。「春」は「一月〜三月」。「春のいそぎ」や「春のまうけ」とは、「正月の準備」のこと。よって、正解はハ。

〔解答〕

① イ　② ロ　③ へ　④ ロ　⑤ ハ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第四講　解答解説

〔解説〕

① 選択肢「唐の国の女性たちは、肝がつぶれるほどびっくりして中納言に思いをかけない者はなく、また」と「〜者は病気になってしまいそうで、自分こそはと思っている女性たちだけが――と思った。」の部分はすべて共通。「〜者」の「〜」部分の本文該当箇所は「**及ぶまじきは**」の部分である。直訳すると「及ばない（者）は」。何が及ばないのか選択肢を見比べてみると、a「容姿」、b「自分の思い」、c「身分」、d「年齢」、e「場所」にそれぞれ言及している。こういう場面（恋愛系）で使われている場合、身分の話であることが多いが、明確に書いているわけではなく決めかねるので、ひとまず保留が妥当。次に、「――と思った」の「――」部分を確認。本文該当箇所は「**かくておはするほどだにも、見え知られたてまつらばや**」の部分。まず「かくて**おはする**」と**尊敬語**を使用していることに注目。セリフの中で尊敬語を使用しているため、そこの主語は「自分以外」（話している人が天皇でないため、自敬表現は考えられない）。よって、「せめて自分が」となっているa・bは削る。該当部分を直訳すると、「せめてこのようにいらっしゃる間だけでも、知られ申し上げたい」。「このように」の解釈だが、リード文の情報もあわせて、唐の国に来ている中納言を見ながらの発言であることから、cの記述に特に不都合がない。「知られたい」とはかけ離れている解釈のdは削る。「このようにいらっしゃる」の主語が「后」になっていることと、「后の力で」ということが読み取れないためeも削る。よって、cが正解。

② 「枯れ**で**」の「**で**」は打消接続。よって、「枯れない」ので、「ひとたび枯れても」となっているa・cは削る。三句目「にほは**なむ**」の「**なむ**」は、「未然形＋なむ」であることから「他者願望（＝〜してほしい）」。よって、eが正解。

③ 「盛り過ぎさせたまひ**ぬ**」の「**ぬ**」は、「連用形＋ぬ」なので「完了の助動詞」。よって、「盛りは過ぎた」ので、「過ぎておらず」となっているdは削る。「おぼろけの人見えたまふべく**やは**」の「**やは**」は反語。「おぼろけの人」は選択肢から「普

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

通の人」という解釈になることがわかる。選択肢より、その続きが「釣り合う」か「釣り合わないか」のような話をしているので、その解釈にあわせて本文「見えたまふべくやは」を解釈すると、「結婚なさるだろうか、いや、しない」となり、結論として「釣り合わない」といっていることがわかる。よって、正解はａ。ちなみに、選択肢「狭衣の君は、少将命婦の局に時々お立ち寄りになるということだったので、そのことを誰かがいわくありげに言いふらしているのだろうと思われる。何事もお仕えする人の心がけにつけてこのような問題も生じるのだから」の部分は共通。その続きの本文該当箇所は「またまねびをだに**な**したまひ**そ**」の部分。「**な**～**そ**」は禁止であるので、少なくともａ・ｃ・ｅに絞れることから、万一、ｂかｄを選んでしまった人は「な～そ」に気をつけること。

〔解答〕

①　ｃ　②　ｅ　③　ａ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第五講　解答解説

〈解説〉

① a「ありがたし」は重要単語で、「めったにない・めったにないほどすばらしい」などの意味。よって、正解はロ。b「やむごとなし」も重要単語で、「捨ててはおけない・格別だ・尊い」の意味。傍線部の直前が「智ある」なので、ここではイの「ひときわ尊い」が正解。

② 「内」は重要単語で、「宮中・天皇」などの意味が大事。よって、ロかハに絞る。「返りまゐりたりける」は「引き返し参上した」ということなので、ハが正解（ちなみに、この一文だけでは「忠兼は、得任を」なのか、「得任は、忠兼に」なのかは判断不可。ここでは後半部分の重要単語を確認する意図で出題）。

③ 「せしむ」という動詞はないのでイは削る。助動詞「しむ」は未然形接続なので、ニかホに絞る。「たまふ」は尊敬の補助動詞（謙譲の補助動詞「たまふ」は、終止形の形ではほぼ使われない）。「ぞ」の接続は、活用語であれば連体形であることからも、やはりニが正解。

④ 「いさ」とセットで使用されるものは「知らず」。「いさ知らず」は「さあ、どうだかわからない」という意味。よって、ロが正解。

〈解答〉

①　a　ロ　　b　イ　　②　ハ　　③　ニ　　④　ロ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第六講　解答解説

〔解説〕

① a「いつしか」は重要単語で、「早くも・早く」の意味。よって、ホが正解。b「かしづく」も重要単語で、「大切に育てる・大切に世話をする」の意味。単に「養育する」のではなく、「大切に、大事に」というのが重要で、文脈上も「養育する」より「大事にする」が適当。よって、ニが正解。

② 古文常識問題。「九月九日」は「重陽」の節句。よって、ハが正解。

③ 傍線部Aは助動詞「す」。真下に尊敬語がないため、意味は「使役」と確定。選択肢ハが助動詞「す」で、真下に尊敬語「給ふ」があるが、傍線部の前に「俊頼朝臣**に**」と使役の対象があるため、使役だとわかる。よって、ハが正解。ちなみに、イは、「〜**せ**ば〜まし」の「**せ**」で、過去の助動詞「き」の未然形。ロは、サ変動詞「す」。ニは、尊敬の助動詞「さす」。ホは、「V＋さす」＝「Vしかけて途中でやめる」の意味の「さす」の連用形。

④ 「ひさかたの」や「ぬばたまの」など、特定の語を導き出す通常五文字の言葉を「枕詞」という。よって、ホが正解。関西学院大はこのように、単語、文法、古文常識、和歌、解釈、敬語等、様々なジャンルから出題され問題数も多いので、確実に取れる知識問題は落とさないように気を付けること。ちなみに、「和歌の修辞技法」に関しての詳しい講義は、『センター古文漢文対策講座』の第二講で実施していますので、和歌が苦手で未受講の方は是非受講してください。

〔解答〕

① a ホ　b ニ　② ハ　③ ハ　④ ホ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第七講　解答解説

〈解説〉

① 設問文の「させ」は、助動詞「さす」の連用形。真下が「奉る」と尊敬語ではないので、この「させ」の意味は使役。選択肢の中で、下に尊敬語がついていないのはウのみ。接続も「御覧ぜ」とサ変動詞の未然形なので、使役の助動詞「さす」である。よって、ウが正解。ちなみに、アは「申す」の未然形「申さ」の活用語尾＋助動詞「す」の連用形。イは、下が「たまふ」と尊敬語で、主語が「帝」。文脈からも「尊敬」の意味である。エは「許す」の未然形「許さ」の活用語尾＋助動詞「す」の連用形。

② 設問文の「なむ」は、四段活用「入る」の連用形に接続しているので、助動詞「ぬ」＋助動詞「む」。上が連用形の選択肢はアのみ。よって、アが正解。ちなみに、イは係助詞「なむ」、ウは未然形に接続しているので、他者願望の終助詞「なむ」、エはナ変動詞「往ぬ」の活用語尾＋助動詞「む」。

③ 選択肢のイ・エが係助詞と考えられるが、文末が「めり」と終止形のため、これらは不適切。ア「え」は、打消と一緒に用いて「〜できない」という不可能の呼応の副詞。ウ「な」は、「そ」と一緒に用いて「〜するな」という禁止の呼応の副詞。設問文の空欄の下は「行くまじかめり。」で、打消系統の助動詞「まじ」がある（「まじ」の連体形「まじかる」の撥音便無表記「まじか」）。「そ」はないので、このことからもアが正解。

④ 文末が空欄の場合は、上をざっと確認して係助詞か疑問副詞の有無を確認する。この場合、「いかでか」（＝疑問副詞「いかで」＋係助詞「か」）があることから、文末は連体形。選択肢で連体形はアとエ。下に助動詞がないことから、補助活用ではないアが正解。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

⑤「はらから」は重要単語で「(母を同じくする) 兄弟姉妹」の意味。よって、イが正解。

⑥「ふる」は掛詞で頻出。選択肢にあるように「経る」「古」「振る」「降る」から文脈で適切なものを選ぶ必要がある。まず「世にふる」から考えると「経る」であることから、イとウは不適切。下の句で「雨」の話題があることから「降る」のエが正解。近畿大学も関西学院大と同じように、様々なジャンルの問題が問われる。和歌が問われる場合も多い（第六講の復習問題の解説にも書きましたが、「和歌の修辞技法」に関しての詳しい講義は、『センター古文漢文対策講座』の第二講で実施していますので、和歌が苦手で未受講の方は是非受講してください)。

⑦こちらも和歌の修辞技法の問題。十七音目が「の」で「〜のように」と訳せる（安積香山の姿まで映って見える山の井戸のように浅い）ので、序詞である。よって、イが正解。

⑧『和漢朗詠集』の撰者は藤原公任。よって、エが正解。文学史も出題されることが多いので、文学史の学習も必要。

〔解答〕

①ウ　②ア　③ア　④ア　⑤イ　⑥エ　⑦イ　⑧エ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。